

清末民国初における普洱茶生産について

西川 和孝*

清末民国初、雲南では海関の設置や交通通信インフラの整備が進み、世界経済との結びつきが強化され、海外との自由貿易が促進された。このような状況の中で、普洱茶の栽培地域は六大茶山から雲南西南地域一帯にまで急速な広がりを見せる。本論文では、当該時期に生じた普洱茶の生産と消費の拡大に焦点を当て、その要因を考察する。

そこで、普洱茶栽培の発展に貢献した政府関係者の史料をもとに、拡大した栽培地域と生産量から説き起こし、消費市場およびその消費量を明らかにしたうえで、この背景にある両地域を結ぶ物流の変革と茶の品質向上の実態解明を図る。

本稿の分析を通じて、①世界経済との一体化のもと拡大する市場に対し、近代的な交通機関の導入により物流の迅速化と輸送コストの削減が実現され、生産地と消費地の時間的・経済的距離が短縮されることで、規則的な輸送が可能となり、大量消費を支えたこと、②市場のニーズに応えるために、清代半ばから培われてきた栽培加工技術が各地域に移転され、高品質な普洱茶の生産に注力することで、茶の需要がより一層喚起されたことを指摘する。

最後に、英領インド帝国経由でチベットに輸出された普洱茶の事例を踏まえ、当時の雲南省が世界経済に組み込まれていく過程について、滇越鉄道を介した香港を中心とした枠組みだけでなく、雲南の西側との経済的結びつきをも視野に入れる必要があることを強調する。

キーワード

普洱茶、物流、技術移転

目次

- | | |
|------------------------|-------------------|
| I はじめに | 1 消費地拡大と消費量増加について |
| II 普洱茶の概要 | 2 消費地と生産地をつなぐ物流 |
| 1 普洱茶とは？ | V 普洱茶の品質の向上と技術移転 |
| 2 明清期の普洱茶生産 | 1 猛海における加工技術移転 |
| III 清末民国初における普洱茶生産について | 2 元江における栽培加工技術移転 |
| 1 新たな栽培地域 | 3 大理における加工技術移転 |
| 2 年間生産量の増加 | VI おわりに |
| IV 普洱茶消費の伸長と物流の変革 | |

* 明治大学

I はじめに

現在、観光業が盛んな雲南省は、一見すれば、地理的に内陸の奥深くに鎮座し、孤立した世界というイメージを抱かせる。しかし、雲南省の歴史を紐解いていくと、古来より外界とつながりを持ち、経済を通じて周辺地域に重要な影響を与えてきたことが明らかになる。特に、明清交代期の呉氏統治時代に始まり¹、清代中期以降には銅銭の鑄造に必要な原料供給地として銅山の開発が進められ、雲南と全国各地を結ぶ銅の輸送ルートが整備され、清朝の貨幣政策を支える経済基盤となっていた（西川 2015: 137-150）。

清末民国初になると、世界市場との結びつきが強まっていく。錫などの豊かな鉱山資源が眠る雲南省に対して、西方からは1886年にビルマを英領インド帝国に併合したイギリスが、南方からは1887年にトンキンを植民地化したフランスが、それぞれ雲南省の経済的権益を狙い、激しい角逐を繰り広げることとなる。まず、1887年に清朝との間で「統議界務・商務専条」の締結を通じ、蒙自に海関設置を約束させたフランスは、1895年の「統議界務・商務専条附章」によって思茅にも海関を開くことを認めさせた。ついで、トンキン雲南間の鉄道敷設権や雲南省内の鉱山採掘権を獲得し、清朝に対して輸入税3割、輸出税4割それぞれ関税の引き下げを承諾させた。一方、イギリスは、1897年の「滇緬界務・商務統議附款」によって騰越および思茅に領事の設置を受け入れさせる。国際貿易を管理する海関が、上記のような経過を経て1889年に仏領インドシナ連邦に隣接する蒙自県に、1897年に普洱茶の集散地である思茅庁に、そして、1900年に英領インド帝国の一部となっていたビルマに通じる滇西地区の交通の要衝である騰越庁に設置され、それぞれ貿易都市として開放されることとなった（栗原 1991；石島 2004: 19-20）。これら海関設置に先立ち、1885年に雲貴総督岑毓英による電信建設の提議を契機として、1911年までに商業利用も見据えた電信工事が進められた。これにより、雲南省は国内のみならず、仏領インドシナ連邦との間でも電線が接続され、情報伝達の速度が飛躍的に向上した（白鳥 2022）。加えて、1910年には安価でスピーディな長距離大量輸送を可能にする昆明とハノイを結ぶ滇越鉄道

がフランスによって敷設されたことで、雲南省と外界を結ぶ通信および交通インフラの整備が進展した（篠永 1992；久保 2019: 38-41）。

また、こうした変化は、近代的な金融システムの構築にも及んだ。海関が置かれた蒙自に1912年に富滇銀行が、1914年にインドシナ銀行が相継いで支店を開設したことで、安定的な取引を支える役割を果たした。とりわけ豊富な資金力を誇るインドシナ銀行は、仏領インドシナ連邦植民地の中央銀行としてアジアに多くの支店を有しており、大型の融資が可能となったことで、金融面でも規模の小さい事業主がビジネスを展開するうえで環境が整いつつあった（権上 1985: 159-170）。

さらに、19世紀末から20世紀の初頭にかけて、インド・日本・中国・東南アジアを中心とするアジアは、欧米から導入した交通・通信・金融などのインフラを基盤として、綿業を機軸とする国際分業体制を発展させ、欧米向け輸出に依存しながら、域内でもその需要を急激に拡大させた。そして、広大なネットワークを持つインド人や中国人の商人が、アジア間貿易を地域レベルで支え、アジア域内の貿易額は欧米間のそれに肩を並べるほどに成長した（杉原 1985）。

アジア域内の貿易が世界市場において存在感を高めつつある中、雲南省では各種インフラ条件が整うことで、ヨーロッパ諸国の進出による自由貿易がスムーズに促されることとなり、交易品の大量買いつけによって国内を上回る需要をもたらした。雲南の社会経済に地殻変動を引き起こすこととなった。さらに、これにともなう鉄道敷設や自動車道路の整備は、物資の流通量の増加をより一層後押しした（増田・加藤・小島 2008: 55-80）。

19世紀末から欧米列強の影響が広がる変革の時代において、多様な天然資源を誇る雲南省は、アヘン・錫・普洱茶などの主要な輸出品を通して、世界市場と経済的結びつきを強めていく。雲南省の広い地域で栽培されたアヘンは、海外に比べて安価でかつ高品質という特徴を備えており、19世紀後半期より仏領インドシナ連邦経由で海外市場に向けて盛んに輸出され、清末民国初にアヘン禁止の国際的機運が高まって以降も、密輸出によって雲南経済を下支えした（秦 1998: 60-91；西川 2017・2021）。また、民国期雲南におけ

¹ 呉氏統治時代に、雲南で鑄造された銭貨が、ベトナム側に輸出された。ベトナムでは、これを模倣した銭貨が鑄造され、これら銭貨はインドネシアのバリ島でも出土している（西川 2024: 289-293）。

る輸出の大宗を占めた箇旧産の錫は、当初広西省を経由して陸路で運搬されていた。しかし、滇越鉄道の開通により大量輸送の時代が始まり、缶詰の原料などの世界的な需要の高まりを背景に、輸出量は急増した(武内 2003; 楊・楊 2010)。そして、本稿の主題となる普洱茶は、19世紀末に仏領インドシナ連邦を経て一部の茶が香港に出荷されたことを契機として、その後の滇越鉄道や海運を利用した海外輸出につながっていくこととなる(西川 2015: 227)。

ただし、従来の研究では、近代化の象徴である滇越鉄道敷設にともなう飛躍的な貿易拡大というインパクトも手伝い、いずれの輸出品も仏領インドシナ連邦のハノイ経由で香港に輸出された点に主眼が置かれ、雲南経済はアジアのハブ港である香港を中心とした国際的枠組みの中で論じられるにとどまってきた(石島 2004: 57-62; 楊 2009: 159-169; 西川 2015: 209-231)。その結果、雲南の西側に隣接するビルマを含む英領インド帝国との経済交流に関する議論は、依然として不十分である。雲南経済と世界市場との関連性を考察するためには、英領インド帝国などの西方との国際的な関係を考慮に入れた、より包括的な議論が求められるであろう。

そこで、本稿では、上記の命題に対して、香港を中心とする国際的枠組みの中だけでなく、英領インド帝国との間でも取引があり、清末民国初の関連史料が比較的豊富に残る普洱茶に注目する。

さて、かくの如く清末以降に、主要輸出品となった普洱茶の歴史については、これまで多くの先行研究がある。雍正年間のシブソンパンナー王国を対象とし、その直轄地化を論じたクリスチャン・ダニエルスは、清朝による介入を許した原因として、茶山が生み出す利益を巡って漢人商人と山地民との対立、さらにはこれに対する地元土司の無策があったことを指摘している(ダニエルス 2004)。

乾隆年間に入ると、漢人が地元社会に徐々に浸透し、土地を買って茶園を経営するようになった。そして、ついにはシブソンパンナー王国側も、茶交易からもたらされる利益の確保という思惑も重なり、宮廷献上用の貢茶の栽培の負担を求める代わりに、無断で入植した雲南南部の石屏出身の漢人に対して入植を迫認することになった。武内房司は、こうした茶山への漢人移住の原因として、商業移民による積極的な経済的利益の獲得があったと指摘している(武内 2010)。また、

筆者は、石屏漢人が茶山において普洱茶の栽培技術や土木技術、さらに同郷のネットワークを駆使して、徐々に地元の土司を凌駕していく過程を素描した(西川 2015: 170-179)。

本稿の対象時期となる清末民国初に関しては楊志玲による詳細な研究がある。楊は当該時期の生産地域拡大や生産量増加に関して整理をおこない、消費地との関係性について分析したうえで、その全体像や歴史的な位置づけをおこなっている。楊は、民国期以降の普洱茶生産拡大について、西洋から導入した加工工程の機械化に加え、交通、通信、金融および世界経済との一体化など同時代的要素との関連性を指摘する(楊 2009)。

また、内陸の奥地で生産される普洱茶に焦点を当てた場合、茶の生産地と国内外の消費地を結びつける物流、つまりこれを支える交易路や輸送手段が重要な鍵となってくる。北から南に向かって流れる紅河・瀾滄江・怒江を代表とする急流で水運に適さない大小河川によって東西に分断される雲南省では、急峻な山地が交通の妨げとなっており、荷馬を利用したキャラバンである「馬幫」と人が荷を担ぐ「荷夫」が伝統的な運輸手段として活躍していた(石島 2004: 21)。これに関連する雲南から東南アジアにいたる交易路の全体像については、栗原悟が、雲南における回族反乱後の光緒年間初頭から英仏勢力の進出という時代的背景を踏まえつつ、馬幫に焦点を当て、回族の馬幫の活躍による交易路の拡大とその後の交易路沿いに出現した各地の商人勢力の成長を概観する(栗原 1991)。また、Ann Maxwell Hill が、19世紀末から1940年代までの六大茶山と新興の猛海茶山に焦点を当て、隣接する英領インド帝国や仏領インドシナ連邦に続く普洱茶の国際的な交易路の変化を時間軸に沿って明らかにしている(Ann 1998: 73-75)。このほか、チベットを巡るイギリスと清朝の政治的関係性の視角から、英領インド帝国経由で雲南からチベットに向かう交易路の開発とチベットにおける普洱茶の浸透を論じた劉志揚による精緻な研究がある(劉 2017・2021)。

本稿では、これら先行研究の成果と課題を踏まえ、民国期に普洱茶の発展に寄与した政府関係者が残した史料をもとに、清末から民国初、具体的には日中戦争の影響が雲南に及ぶ1940年前後までに焦点をあて、明清代から受け継がれてきた栽培加工技術との歴史的連続性を踏まえつつ、普洱茶生産拡大の実態を論じて

いく²。具体的には、Iで普洱茶の名前が史料上に現れる明代後半期から19世紀前半までの草創期の茶山開発を検討し、明代後期から清代半ばまでに起きた普洱茶の品質の向上と栽培加工技術の変化を指摘する。つづいて、IIからIIIで、清末民国初の普洱茶の栽培地域拡大や生産量増加、さらには国内外を含む消費地との関係性および物流について系統的整理をおこない、IVで、市場において普洱茶需要が増えた根本的要因を栽培加工の技術移転の角度から探っていく。そして、これら課題点を考慮しつつ、清末民国初に起きた普洱茶生産拡大の実態解明を通して、仏領インドシナ連邦を経由する香港や、英領インド帝国を通じてチベットにいたる東西に渡っておこなわれた普洱茶の移輸出が雲南経済に与えた歴史的意義という命題にも解答を導き出していく。

II 普洱茶の概要

本章では、普洱茶に関する基本的知識を確認したうえで、史料上にその名が現れる明代後半期から、栽培加工技術の向上が起こり、普洱茶生産が本格化する19世紀半ばまでの普洱茶の歴史について論じていく。

1 普洱茶とは？

私たちの周囲に存在する緑茶や紅茶などの多様な茶は、元々同じ茶葉を原料としており、加工の過程で生じた違いによって分類されている。茶葉の分類は、新鮮な茶葉を加工する過程において、茶に含まれる茶のポリフェノールの酸化具合、即ち発酵程度の相違によって形成される。発酵の程度が低い順から列記すると、緑茶（非発酵茶）、白茶（微発酵茶）、黄茶（軽い発酵茶）、烏龍茶（半発酵茶）、紅茶（全発酵茶）、黒茶（後発酵茶）の6種類に大別される。例えば、日本でもポピュラーな緑茶は、酸化程度が10%であるのに対して、普洱茶は、一般的に黒茶に分類され、酸化程度は80-95%にも達する（姚 2007: 29-30）。

実のところ、普洱茶には、普洱茶緑茶や普洱茶紅茶もあるが、日本で通常「プーアル茶」と称される茶は、黒茶（後発酵茶）のことを指す

（松下 1986: 85）。黒茶（後発酵茶）としての普洱茶の製造工程は、一次加工として、①茶摘み②釜炒り（加熱）③揉捻（茶葉を揉むこと）④干す（乾燥）の四工程に大きく分類される（松下 1998: 12-13）。②釜炒りは、発酵を止める工程であり、熱を加えることによっておこなわれる。この工程には「蒸す」ことで加熱する方法もあり、後述するように清代半ばまでの普洱茶は、この「蒸す」方法を採用している。また、③揉捻には、茶葉の形を整えることと、茶葉の細胞に傷をつけることで成分の抽出を進める目的がある（工藤 2007: 311、328）。

つづいて、これら作業を経て完成した荒茶に、さらに二次加工である発酵を加えたものが、一般にいうところの黒茶（後発酵茶）に相当する普洱茶となる。昔は時間をかけて徐々に発酵させた、これを「生茶」と呼ぶ。その一方で、熟成を早めるために、「渥堆^{あくたい}」といわれる一連の工程、つまり荒茶を高温多湿な場所に置き、付着した菌類による発酵、同時にカテキン類の酸化をおこなったものを「熟茶」という（工藤 2007: 45、299-300、322）。

さて、日本で広く親しまれている「プーアル茶」は、明清時代において、現在の雲南省西双版纳タイ族自治州勐臘県の北部、メコン川の東岸地域で生産されていた（図1）。この地域には、後に述べる六大茶山（攸楽・革登・倚邦・莽芝・蛮崙（蛮磚）・漫撒〔後に易武〕）



図1 六大茶山

² 民国期の普洱茶の発展に寄与した人物と記録に関しては、（曹・劉 2024）を参照されたい。

が存在し、古くから茶の産地として広く知られていた³。

2 明清期の普洱茶生産

普洱茶の概要の解説につづいて、本節では六大茶山を中心として明清期の普洱茶の歴史を辿っていくこととする。六大茶山を含む雲南省西双版纳タイ族自治州は、もともと盆地と周辺の山地を一つの単位（ムン）としたタイ系土司のシプソンパンナー王国に属していた。シプソンパンナー王国は、国王（ツァオファー）をリーダーとしてそれぞれのムンを管轄する首長（ツァオムン）が従属する形で成り立っており、盆地連合王国を形成していた。元王朝が中華王朝において、王国を土司制度に組み込む先駆けとなり、官職を与えたうえで、行政機関として徹里軍民総管府を設立した。つづいて、明王朝は車里軍民府に改め、洪武17 (1384) 年には車里軍民宣慰司使とし、ついで清朝政府もシプソンパンナー国王に車里軍民宣慰司使の称号を与えることで慰撫を図った。

また、王国の経済基盤は、平野部で水田耕作を営むタイ系民族によって支えられていた一方で、山地で焼畑耕作を中心に生活をする山地民によって生み出される山貨も重要な収入源であった。その中でも普洱茶は主要な山貨の一つであり、現在のプーラン族やハニ族にあたる山地民がその栽培を担っていた（ダニエルス 2004）。

さて、当該地域において普洱茶の存在が史料上明確に確認できるのは、万暦年間 (1573–1620年) の『雲南通志』が初めてであり、該書には「車里の普耳に至るに、ここで茶を産す」とある⁴。ただし、具体的な記述は、同時期に書かれたと推測される謝肇淛が著した『滇略』が初見となる。該当箇所の内容を示すと以下の通りである⁵。

雲南省が良いお茶を生産していないのではなく、現地の人々がお茶の摘み方、正しいお茶の淹れ方を知らないのであり、お茶自体の品質が良くても、本当の「茗」（良いお茶）とはいえない。昆明の泰華

茶は、雷鳴が初めて響く（春）頃に収穫されるものであり、色や香りは松蘿茶に劣らない。しかし、手揉みするとムラが生じる。（大理盆地の洱海の西方に位置する）點蒼山の麓にある感通寺の茶は、これに勝っているものの、価格は高めである。多様な人々が嗜むのは、同じく普洱茶である。この茶は蒸して固められたものであり、お湯に浸すことで香りが引き出され、水を飲むよりはやや風味が良い程度である。

この一節から、雲南産の茶は良質ではあるものの、技術的な面で未熟であったことが読み取れる。また、一見したところ、普洱茶が雲南全域で一般の人々の間で飲まれているような印象を与えるものの、ここは慎重に考える必要がある。著者の謝肇淛は、万暦年間に雲南布政使右参政に任じられ、滇西に駐留した経歴を持ち⁶、昆明の泰華茶、いわゆる太華茶や大理の感通茶を紹介している。著者の滞在歴を考慮すると、飲茶文化が一定程度根付いていた昆明と大理という限られた地域において、「土庶」とされる多様な階層の人々が、風味がやや水より良い程度の安価な普洱茶を嗜んでいたと考えるのが妥当であろう。

『滇略』の内容と普洱茶に関して記録された史料自体が極少である点などから推測すると、明代後期の16世紀末から17世紀初頭の段階では、普洱茶は、雲南省の昆明や大理一帯の人々に飲まれていたに過ぎず、その風味も到底洗練されたものではなかった。

明代のこれら散見せられる記述につづいて、普洱茶の名称が史料に登場するのは、明清の交代と呉三桂による三藩の乱を経て、雲南省の情勢が安定する18世紀初頭まで待たなければならない。

この頃になると、普洱茶が生み出す利益を求めて省内外から多数の漢人が当地を訪れるようになる。いわゆる攸楽・革登・倚邦・奔枝・蛮崙・漫撒の六大茶山において、18世紀初頭の雍正年間には、漢人商人が茶山を訪れ、茶を集め、買い付けをおこなうようになる。これに先立ち、清初より哀牢山脈一帯に巣くう山地民によって繰り返される騒擾に悩まされていた清朝

3 六大茶山の中で攸楽茶山のみ、行政区としては西双版纳タイ族自治州景洪市基諾郷に属しており、猛臘県の西側に隣接している地域に位置している。

4 万暦『雲南通志』巻16には、「至車里之普耳，此处産茶」とあり、ここでは、「洱」ではなく、「耳」という字が当てられている。

5 『滇略』巻3には「滇苦無茗，非其地不産也，土人不得採取製造之方，即成而不知烹瀹之節，猶無茗也。昆明之泰華，其雷声初動者，色香不下松蘿，但揉不勻細耳。點蒼感通寺之産過之，值亦不廉。土庶所用，皆普茶也，蒸而成团，瀹作草氣，差勝飲水耳」とある。

6 康熙『雲南通志』巻20には、「謝肇淛，福建長樂人，万暦中任右参政。博洽多才，彈压迤西，郡邑士民德之」とある。

は、彼らの避難先となっていた隣接するシブソンパンナー王国に神経を尖らせていた。折しも中国の全国市場で販売できる商品を捜し求めていた漢人商人が茶山に入り込み、高利貸しなどを通して暴利をむさぼる中、地元山地民との間に衝突を引き起こした。反乱鎮圧後、雲貴総督鄂爾泰は、シブソンパンナー国王がこの地域の統治能力に欠けていると判断し、治安維持を目的としてメコン川東岸地域の六大茶山を含む地域を直轄地として管理する方針を固めた（ダニエルズ 2004）。

清朝政府は、山地民と漢人との間の摩擦を懸念し、漢人商人による茶山への直接的な買い付けを禁止した。ついで雍正 7（1729）年に設置された思茅通判の管轄下にある官設の茶の交易場である総茶店においてのみ、取引が許可されることとなった。さらに清朝はシブソンパンナー国王に隷属する 13 のツァオムンに土司の官職を与え、王国を構成する各ムンと直接的な関係性を結んだ。この措置にともない、茶山に関しては、地元の土司が管理を担うこととなり、倚邦土把総曹氏が、六大茶山のうち、攸楽・革登・倚邦・莽芝・蛮崙（蛮磚）の五茶山を、易武土把総伍氏が、磨者河東岸の漫撒茶山を、それぞれ管轄した。ついで、両土司は、清朝宮廷用の茶である貢茶の任務も課せられ、これよりのち、大きな負担を強いられた。

当初の清朝の意図とは異なり、地元で茶を集めるだけであった漢人は、次第に地域社会に溶け込み、土地の購入を通して茶園の経営に直接関与するようになった。そして、乾隆年間末期にいたり、漢人移民による積極的な経済的利益の獲得に加え、シブソンパンナー王国側の茶交易からもたらされる利益の確保、さらには高い品質が求められる皇室献納用の貢茶栽培を漢人に肩代わりさせたいという地元土司の思惑も重なり、清朝はついに漢人の入植を正式に許可することとなった（武内 2010；西川 2015: 173-175）。

この頃から普洱府とは元江（＝紅河）を挟んで北東部に位置する石屏県出身の漢人が存在感を発揮するようになり、茶山管理の責務を担う倚邦土把総曹氏と易武土把総伍氏の協力のもと、漫撒に石屏会館が建設された。同時に、漫撒の南に隣接する易武でも当地を管轄する易武土把総伍氏が石屏県出身の漢人を招聘したことを契機に、茶園経営が開始された（西川 2015: 172-175）。

石屏漢人の故郷である現在の石屏県の中央に位置する石屏盆地は、中央に二つの湖を抱え、水資源には恵まれているものの、比較的狭小な土地であった。明初

に屯田が設置され、山裾の緩やかな傾斜地において盆地の耕地開発が開始され、後に大規模水利事業をとまなう耕地開発や商品作物の栽培により土地資源の効率化を目指した。しかし、明代後半期には、耕地不足と人口増加によって石屏盆地は早々に構造的飽和状態に陥った。結果的に清代以降、石屏の人々は、新たな生活空間を求めて元江以南地域に広がるフロンティアに飛び出し、各地で生活地盤の構築を模索していくこととなる。このとき、移住活動の原動力となったのが盆地開発の過程で獲得した土木技術や栽培技術など各種技術であった（西川 2015: 45-95）。

茶山入植の正式許可を得た石屏漢人は、経験から培った各種技術を活用し、貢茶を担った茶栽培はいうまでもなく、茶の収集地である思茅に向かう道路の建設や架橋工事を実施するなど交通インフラ整備も積極的におこない、普洱茶の発展に尽力した。易武における普洱茶の栽培と物流を掌握し、徐々に実力を蓄えつつあった石屏漢人は、19世紀半ばには地域社会においても発言力を強め、その勢いは易武土把総伍氏をも凌駕していくこととなる（西川 2015: 175-179）。



写真 1：易武の茶葉を使用して作られた緊圧茶の一形態である茶餅。直径約 19cm、高さ約 2 cm である。円盤状の形で、包装紙に「易武古茶七子餅」の文字が見える。運搬や貯蔵のために 7 個の茶餅を竹の葉で一つに束ねたことから、「七子餅」という名称が付けられた。

如上のように普洱の茶山だけでなく、フロンティアを中心に雲南各地に独自のネットワークを有する石屏漢人は、易武を中心として普洱茶市場において存在感を発揮し、これにともない普洱茶自体も商品として洗練されていくことになる。同時期の史料からも普洱茶に関する変化が垣間見える。例えば、道光 15（1835）年に雲貴総督を務めた阮元らによって編纂された『雲南通志稿』には次のような普洱茶に関する記載があ

る⁷。

思茅庁の調査によると、茶の産地には、倚邦・架布・嶧崆・蛮磚・革登・易武という六山がある。土壌の性質によって風味が異なるが、赤土や土中に雑石があるものが最も良いとされ、消化を助け、寒邪を取り除き、（体の正常な生理機能を阻害する）毒素の排出に優れている。2月に摘み取ると、蕊が極めて細かく白いので、「毛尖」と呼ばれる。摘み取り、蒸したうえで揉捻し（円盤状の）茶餅の形にする。葉は少なく柔らかで、「芽茶」と名付けられている。3、4月に摘み取られた茶葉は、「小満茶」という。6、7月に摘み取られた茶葉は、「穀花茶」と呼ばれる。大きくて丸い形の場合は、「緊団茶」と呼ばれ、小さくて丸い形の場合は「女兒茶」といわれる。商人の手を経て、外側はきめ細かく、内側が粗いものは、「改造茶」と呼ばれる。茶を揉捻する際、あらかじめ黄色く、かつ丸まっていない茶葉を選択したものは、「金月天」と呼ぶ。強く固まり、ほぐれないものは、「挖搭茶」（いわゆる疙瘩茶）と呼ばれ、風味は極めて濃厚でなかなか手に入らない。茶を栽培する農家は、常に草刈りに備えており、茶樹の脇に草が生え、味が劣化して売れなくなる。また、茶葉を他のものと同じ器に入れて使うと、その匂いに染まり、飲むことができなくなる。

ここには、明代までの簡単な記述とは異なり、普洱茶栽培に適した土壌、茶摘みの時期にもとづく分類、そして、茶の栽培加工管理に関する様々な注意点が記載されている。茶の製造工程では、茶摘みの後に「蒸す」という加熱作業を経て、揉捻をおこなっていることから、風味の点でも明代のものとは異なり、濃厚な味へと変化している。現在の製茶工程と照らし合わせても、基本的な手順は踏んでいるといえよう。また、運搬に適した、茶葉を圧縮成形して固めた「茶餅」などの緊圧茶が紹介されており、形状の大小によって「緊団茶」や「女兒茶」と別々の名称が付されていた。そ

して、特筆すべき点として、商人が故意に内側の粗い茶葉を隠すために表面をきめ細かい茶葉で覆ったと推測される「改造茶」という一種の緊圧茶のフェイク商品が、市場に流布していたことである。裏を返せば、この時期には、「緊団茶」や「女兒茶」が一定の信頼を得た商品としてブランド化されていたことの証左ともいえよう。

清代半ばの史料の特徴として、明代と比すると、生産地・栽培方法・加工方法に対する意識が強く反映されており、普洱茶の商品的価値に関心が向くようになっていたことが読み取れる。清代末期には、加熱方法において「釜炒り」が採用されているという記述もあるが、基本的な製造工程という点では19世紀前半頃と大きな変化は見えない⁸。

明代後半期において普洱茶は、主に昆明や大理を中心とする地域において飲まれ、その風味もやや水より良い程度であった。しかし、清代に入り、省内の情勢が落ち着くと、全国市場で販売できる商品を探し求めていた漢人が茶山に入り込むようになった。特に、乾隆年間後半以降、商売に長け、栽培技術にも卓越した石屏出身の漢人が入植し、栽培を開始して以降、普洱茶は一定の品質を保証できる商品としての価値を持つようになった。そして、茶の風味も「やや水より良い程度」から「極めて濃厚」へと評価は一変した。石屏漢人は自らが持ちうる広いネットワークを通して得た知識をもとに市場の需要に適した商品を供給するべく、必要に応じて様々な形状の緊圧茶を製造していったのであろう。

III 清末民国初における普洱茶生産について

宮廷献上用の貢茶でもあり、確かな技術に裏打ちされた商品として、その価値を着実に高めつつあった普洱茶に関して、本章では、清末民国初、周辺地域に向けて急速に拡大する生産地域と、年間生産量の変化について検討していく。

かつて六大茶山を中心に生産されていた普洱茶は、

7 道光『雲南通志稿』巻70には、「思茅庁採訪：茶有六山，倚邦、架布、嶧崆、蛮磚、革登、易武，氣味隨土性而異，生於赤土或土中雜石者最佳，消食散寒解毒。二月間開採，蕊極細而白，謂之毛尖。採而蒸之，揉為茶餅，其葉少放而猶嫩者，名芽茶。採於三、四月者，名小満茶。採於六、七月者，名穀花茶，大而円者，名緊団茶，小而円者，名女兒茶。其入商販之手，而外細内麤者，名改造茶。將揉時，預挾其内之勁黃而不捲者，名金月天。其固結而不解者，名挖搭茶，味極厚難得。種茶之家，芟鋤備至，旁生草木，則味劣難售，或與他物同器，即染其氣，而不堪飲」とある。

8 『海関十年報告1892-1901』には、「葉はまず手で揉まれ、次に大きな鉄鍋で20分ほど強火で焼かれる。その後、竹製のマットのうゑに広げて日干しにし、ときどき裏返したり揺すったりして、十分に乾燥したところで女性に渡され、茎や花と葉を分けて選別される」とある（China Imperial Maritime Customs, *Decennial Reports*, 1892-1901, Vol. 2. Szemao, 490）。

清末以降、その栽培範囲が隣接する景谷や順寧府南部の瀾滄を超え、順寧府中部の双江や雲県、さらにはその北に位置する順寧府順寧県にまで広がりを見せる⁹。同時に、生産地域の拡大は、産地ごとに、鳳山茶（順寧県産）・猛庫茶（双江緬寧等県産）・景谷茶（景東景谷県産）・三宋茶（車里県産）・大山茶（鎮越江城等県産）・壩子茶（仏海南嶠等県産）などの様々な普洱茶ブランドを生み出していく¹⁰。

1 新たな栽培地域

はじめに、雲南省西南部に新たに栽培が開始された地域について、時系列に沿って考察していく。清末民国初において新たな普洱茶の栽培が最初に明確に確認できるのが、順寧府双江県である。双江県はもともと土地が肥沃で物産も豊富であり、茶の栽培には適していた。そこに1899年から1900年にかけて、彭耀という人物の提案により、仏海（猛海）から茶の種が持ち込まれた¹¹。

次に、普洱府に隣接する元江直隸州の事例を紹介する。民国『元江志稿』巻5には普洱茶の栽培および生産にいたるまでの経緯が具体的に記されているので、以下に引用しておく¹²。

光緒年間半ば、元江の人々の生活は悲惨な窮状にあり、生きていくには困難であったので、気力を奮い起こし荒れ果てた土地に挑み、日々開墾と耕作に励み、懸命に努力した。（元江の）中郷の人々のよ

うに、五大茶山に向かい、単純労働者として生計を立てようとしたものもあり、見聞きしているうちに、茶の栽培と製茶の方法を習得したので、茶の種をたくさん購入して、（元江の）猪街と大小羊街一帯の未使用の土地に戻り、マニュアル通りに植えて、（土を株もとによせる）土寄せもおこなった。数年後ついに山々は緑で溢れるようになり、マニュアル通りに製茶すると、品質・風味・色合いともに（六大茶山の）倚邦や攸楽の茶に劣らないものとなった。売行きは日々好調で、利益もますます拡大し、茶の改良にも努めており、正にその勢いはとどまることを知らない。これが光緒の終わりから現在にいたる状況である。

光緒年間半ば、つまり1890年頃、生活に困窮した元江の中郷出身の人々が、六大茶山に出稼ぎにいった。この出来事が契機となり、茶の栽培や製茶に関する技術を習得し、茶の種を持ち帰って栽培生産を始めたところ、六大茶山に劣らない品質の茶葉の生産に成功した。数年で事業が軌道に乗り、20世紀初頭の光緒年間末には多くの利益を上げるようになった。

最後に、順寧府順寧県の茶栽培の事例を検討する。順寧県の場合は、光緒末年（1908）に順寧府知府の琦麟と紳士の陳維寅が互いに50両を出し合い、茶の栽培を提案したのを端緒とする¹³。この地における茶栽培が成功した経緯については、当地で茶業に従事した李少庵が著した「順寧茶業概況」に詳細に記述されて

9 『統雲南通志長編』巻72には、「滇茶主要産地、大部偏于西南一隅。発源于六大茶山、延及瀾滄江左右之哀牢、蒙寨、怒山間高地。換言之、其發展趨勢、大抵由思茅迤南之江城、鎮越、車里、仏海、五福、六順等県、漸移向西北之瀾滄、景東、双江、緬寧、雲県、而迄于順寧」とある（雲南省志編纂委員会辦公室 1985: 下冊、606）。

10 『雲南経済』第12章には、「雲南所産之茶、以産地別、有鳳山茶（順寧県産）、猛庫茶（双江緬寧等県産）、景谷茶（景東景谷県産）、三宋茶（車里県産）、大山茶（鎮越、江城等県産）、壩子茶（仏海南嶠等県産）、十里茶（昆明県属十里鋪産）、感通茶（大理県産）、太和茶（保山県産）、宝洪茶（宜良路南等県産）等之名称…惟外省人士、則概名之曰普洱茶。然就現下之行政区域論、普洱即今之寧洱県、並不産茶…普洱茶得名之由、当由於往昔著名産茶之六大茶山（所謂六大茶山或謂攸楽、革登、倚邦、莽芝、蛮磚、漫撒；或謂倚邦、架衣、嶧崆、蛮磚、革登、易武；或謂倚邦、易武、蛮磚、莽芝、革登、布架、未知孰是）、為隸思茅庁、思茅庁属普洱府、且当时所産之茶、多数以思茅為集散地、故以是名耳。今則情勢不同、大凡順寧、雲県、双江、緬寧所産、什九以下関昆明為集散地。景東景谷所産、則以昆明為市場。而仏海、南嶠、車里所産、則以仏海為中心」とある（張 1942: L1）。

11 『雲南経済』第12章には、「双江県…土質肥沃、物産豊富、其主要農産、除稻、米、綿花、甘蔗、紫梗外、以茶最著、即所謂猛庫茶也。該県植茶、始於光緒二十五年、由於彭耀氏之提唱。茶種来自仏海、係大山茶…全県年産約一万担、其中十之八九運雲県、下関、銷四川及本省、十之一二運磨栗壩、銷緬甸；而以極少数銷猛定、耿馬、施甸、保山一帶」とある（張 1942: L3）。

12 民国『元江志稿』巻5には「光緒中葉、元人生計日窘、幾有不能生存之勢、於是浚勵憤發荒蕪之田園、日事開墾農林種植、皆竭力講求。如中郷之人、往五大茶山、傭工謀生、日擊耳濡、盡得種茶製茶之法、多購茶種、以歸於猪街及大小羊街一帯隙地、如法種植、而培壅之。三數年間遂蓬蓬勃綠徧山原、依法製成、其實、其味、其色、蓋与倚邦、攸楽之茶相埒。銷路日広、獲利日豊、力図改良發達、正未有艾、是則自光緒末葉以迄於今」とある。

13 民国『順寧県志初稿』巻14には「（光緒）三十四年戊申…是年秋知府琦麟、城紳陳維寅各捐銀五十兩、開闢鳳山森林、倡始植茶」とある。

いるので、以下に引用する¹⁴。

鳳山茶の栽培は、清朝末期に種子を選び、種をまき、苗木を育てることから始まり、茶畑を形成するまで5年のときを要した。護国軍が挙兵し、本省から四川や貴州に出兵した軍隊に順寧人が多数含まれており、従軍の際に茶葉を携えていき、各地で宣伝した。これが評判を呼び、茶荘を開いて、茶を買い付け、四川省に運んで販売する人も出てきたため、売上げが大幅に伸びた。現在、鳳山には約5万本の茶樹があり、1本あたり年間1斤の茶葉を収穫することができ、茶葉の総量は5万斤以上になる。地元で消費されるだけでなく、茶葉のほとんどは騰越幫や喜洲幫、南防一帯の商幫に売られている。民国20（1931）年頃、鳳山で茶葉が成功しているのを見て、地元の名士や一般の人々が、競って茶葉を植え、県城の東鳳山や盤陀石周辺では栽培に成功し、宣伝に努めている。

順寧県では、1908年に知府自らの呼びかけにより始まった茶栽培が、5年の歳月を経て実を結んだ。おりしも、この時期、袁世凱の帝政に反対する唐繼堯・蔡鍔・李烈鈞らが1915年12月に雲南省で独立を宣言、護国軍と命名した袁世凱討伐の兵を起し、護国戦争を開始した（石島 2004: 69-72）。護国軍が四川や貴州に遠征軍を派遣した際、順寧出身の兵士たちが持参していた茶葉を各地で宣伝した結果、順寧産の茶が広く知られるようになり、その後の茶栽培の拡大に寄与した。

これら3つの事例より、いずれの地域でも光緒年間半ば以降、茶栽培が開始されたことが知られる。元江の例に見えるように、清朝末期、周辺地域の労働力を吸収するほど六大茶山における普洱茶の栽培が盛んであり、各地で同様の試みがおこなわれたのであろう。

次節では、普洱茶の栽培地域の広がりにもなう清末民国初の年間生産量の変化について検討していく。

2 年間生産量の増加

清末民国初にかけて普洱茶の生産地域は、六大茶山を中心に滇西南部を覆いつつあった。これにともない、年間生産量も増加の一途を辿る。清末から1910年代までは、辛亥革命後の混乱と治安悪化にともなう地方間の商取引停滞の影響もあり、茶の年間生産量の数値は、おおよそ35,000担から40,000担までの間で推移していた¹⁵。しかし、1920年以降は、著しい上昇傾向を示すようになる。例えば、『海関十年報告 1922-1931年』によると、1921年以前は年間生産量が9,000担であった景東と緬寧は14,000担に増加した。また、以前は茶山としてほぼ無名であった瀾滄は、茶の年間生産量が1,000担を誇るほどにまで成長した¹⁶。

つづいて、1930年前後以降の年間生産量の変化を知るべく、1934年出版の「雲南之茶業」と1942年出版の『雲南経済』に記載されている普洱茶の年間生産量を整理したうえで、表1「民国期普洱茶年間生産量一覧表」として次ページに示す。

おむね「雲南之茶業」は『海関十年報告 1922-1931年』の数値と比較すると、やや少なく、1920年代後半頃のデータと考えられ、一方の『雲南経済』は1940年頃の年間生産量を示していると推測される。ただし、一部の地域に関してはデータ不足のため、両者の比較可能な生産地域に絞って表1の分析を進めていく。まずは、先述した瀾滄は854担から3倍の3,000担に増えており、引き続き増加傾向にあることが確認できる。次に、光緒年間から栽培が開始された順寧は3,200担から2倍以上の8,000担に増加し、六大茶山に隣接する江城や仏海も各々、600担から2,000担、5,000担から15,000担と、年間生産量において3倍の伸びを示している。このほか、滇東北部に位置する大関一帯において僅か30担余りであった年間生産量は、周辺地域を含めて1,600担にまで増加している。

普洱茶の年間生産量においても、1910年代にはせいぜい4万担程度であったのに対して、1920年以降、顕著な増加を示し、1940年頃には約8万担近くに達

14 民国『順寧県志初稿』（巻7、「順寧茶業概況」）には「鳳山茶之栽植始於清末自選種播苗，以迄成林需時五年。迨至護国軍興，本省出師川黔，順寧人服役軍中者甚夥，隨軍攜帶茶葉，到處宣傳。因之受人賞識後，復有人設莊收購，運川銷售，因之銷路大增。目前鳳山茶樹約計五万余株，每株年可採茶葉一斤，總計可得茶葉五万余斤。除供當地消費外，大部均售于騰越及喜洲幫以及南防一帯商幫。民二十年前後，一般紳民人等，見鳳山的茶葉成功，競相栽植，附郭之東鳳山及盤陀石一帯均已栽植成功，甚而推廣」とある。

15 普洱茶の年間生産量の概数については、『海関十年報告 1912-21年』（China the Maritime Customs, *Decennial Reports* [以下 *Decennial Reports* と略称]，1912-21, Vol. 2. Szemao, 372-373）および『海関十年報告 1922-1931年』（*Decennial Reports*, 1922-1931, Vol. 2. Szemao, 364-365）を参照。また、1担は約60kgである。

16 *Decennial Reports*, 1922-1931, Vol. 2. Szemao, 364-365。

表1 民国期普洱茶年間生産量一覧表

生産地	「雲南之茶業」(1934年出版)	『雲南経済』(1942年出版)
生産地	生産量	生産量
瀾滄	854担	3,000担
仏海(猛海)	500,000余斤(5,000余担)	15,000担
順寧 ^{※1}	3,200担	8,000担
鎮越(易武) ^{※2}	2,600担	4,000担
五福	35,000斤(350担)	—
双江	10,000担	11,000担
鎮康	800余担	800担
江城(猛烈)	紅茶600担	2,000担
雲県	紅茶120担・緑茶480担	600担
大関	30余担	1,600担
彝良、綏江、鎮雄、塩津	—	
昌寧	—	300担
景谷	2,000担	12,000担 (景東 70-80%; 景谷 10-20%)
景東	11,350担	
鎮沅	—	2,400担
墨江	—	
元江	2,000担	
緬寧	—	4,000担
思茅(倚邦)	4,000余担	—
車里	—	8,000担
南嶠(猛遮)	—	6,000担
寧江(猛往)	—	8,000担
合計	43,384担	86,700担

史料典拠：褚 1934: 182-183；張 1942: 第12章 L2-L3。

※1：1940年には7,000担に到達。

※2：1920年代後半、出境する者が相次ぎ、茶樹が放棄され、産出量が激減した。

していた¹⁷。

本章では、清末民国初における普洱茶の生産地域および年間生産量の変化を確認してきた。如上のごとく、全体の傾向としては20世紀前半を通して、普洱茶の生産地域の拡大にともない、年間生産量も右肩上がりに伸びていた。史料上で確認できる光緒年間以降に新たに栽培された双江・元江・順寧の3地域に限ただけで、1940年頃の年間生産量は合計で20,000担以上に及んでおり、普洱茶生産の増加に貢献したことは明白である。ただし、民国期に普洱茶の生産量が伸びた要因を、上記3か所に代表される新たな栽培地域の出現にのみ求めるのは早急であろう。例えば、民国期に

代表的な茶生産地となった瀾滄・仏海・景谷・景東・鎮沅には、いずれも樹高15メートルを超える大茶樹が自生している¹⁸。このことから、これらの地域では新たに茶樹を栽培するのではなく、むしろ自生している茶樹に手を加えたり、摘採した茶葉に加工を施したりすることで品質を向上させ、商業的に成功を収めたと考えるのが妥当であろう(表1)。したがって、民国期の普洱茶の生産量増加は、新たな栽培地域だけではなく、茶の自生地が存在も深く関係しているといえよう。

そもそも生産量を伸ばすために必要となる茶業の利益化には、茶栽培に必要な自然環境というまでもなく、消費地との距離、運搬手段の確保、さらには栽培および製茶などの加工に関する技術的な問題など様々な課題が立ちはだかる。

そこで、次のⅢでは、普洱茶の消費地から説き起こし、生産と消費を結ぶ物流にも注意を払いつつ、茶業の利益化における課題を明らかにし、如何にして解決に導いたかを考察していく。

Ⅳ 普洱茶消費の伸長と物流の変革

清末民国初において普洱茶の栽培地域が六大茶山から西北方面に延びていくにともない、生産量も増加した。雲南の西南地域は、茶樹が自生するなど、元来茶樹の生育に適した自然環境が備わっており、栽培地域として成立可能な下地が存在した。清末以降の普洱茶に対する需要の増加が、この地域の栽培拡大と茶の生産量の向上を促進する要因となる。本章では、普洱茶の消費量が増加した消費地を特定し、さらに生産地と消費地を結ぶ物流の重要性に焦点を当てながら、普洱

¹⁷ 表1「民国期普洱茶年間生産量一覧表」の統計では、計算上で年間生産量が8万担を超えるものの、『雲南経済』第12章には「上述各地産額、除宜良、順寧、双江、緬寧、仏海、南嶠、車里等比較可靠外、餘均因未經調查、無統計足資依拠、然大約当不出八万担之数也」とあり、8万担未満と推計している(張 1942: L3)。

¹⁸ 中国を代表する自生茶樹については、松下智が現地調査の成果も踏まえ、詳しく紹介している(松下 2012: 42)。

茶の生産拡大を促進した要因について考察する。

1 消費地拡大と消費量増加について

一般的に消費地における普洱茶の需要が増大することで、供給の必要性が生じ、その結果として商品としての普洱茶の生産量が拡大する。

普洱茶の生産地が急速に拡大する以前、19世紀末における普洱茶の主な消費地は、四川省・チベット・雲南省内であり、思茅経由で移出された約16,000担の内訳は、それぞれ四川省7,200担・チベット4,400担・雲南省内4,000担であり、そのほか貴州省240担、広西および広東は160担であった¹⁹。一方、前章で述べてきたように、1940年頃において雲南産の茶の消費地は、雲南の周辺部を含む東南アジアから中国沿岸部に及んだものの、雲南省内を除けば、依然として四川やチベットがその大宗を占めており、これら地域の需要は依然として旺盛で、高水準を維持していた²⁰。

ここで、普洱茶の消費地と消費量に関する詳細を知り、茶の生産地ごとの供給先について検討していく。民国期の普洱茶の供給先については、「雲南之茶業」と『雲南経済』に生産地ごとの消費地と消費量に関する詳細な記録が残されており、これをまとめたのが、次ページに示す表2である。

表2を考察すると、普洱茶の主要な供給先として、清朝以来の二大消費地である四川とチベットに加え、香港や仏領インドシナ連邦、さらには省内の地域が際立っていることがわかる。

はじめに新たな消費地として20世紀以降に台頭してきた、香港などの中国沿岸部、そして、その経由地となる仏領インドシナ連邦について説明していく。19世紀末、現在のベトナムである仏領インドシナ連邦において普洱茶が、その香り高い風味で高評価を受け、輸出されていた。しかし、1896年の北ベトナムにおける米の不作と関税の引上げにより嗜好品である茶を

購入する経済的余裕が失われた。この結果として、香港に出荷された一部の普洱茶が、思いのほか好評を得たことで、その後の大量輸出につながっていくこととなる（西川 2015: 227-228）。仏領インドシナ連邦を含む香港や中国沿岸部向けの生産地は、メコン川西岸の仏海、六大茶山の一つである鎮越（易武）、そして、その北部に位置する江城と元江である（表2）。いずれの地域も仏領インドシナ連邦に隣接し、交通の便に優れていた。

次に、19世紀末において重要な移出先であった四川省について検討していく。四川は清代から重要な普洱茶の消費地であり、四川向けの生産地の歴史の変遷については、『続雲南通志長編』に「四川省での茶葉販売の伸びについていえば、宋園茶（すなわち大山茶）から始まり、景谷茶（景東に属する景谷街）が続き、今ではそのほとんどが双江と順寧から採取されており、雲南茶の発展の趨勢を明確に示している」という一文が見え²¹、四川向けの普洱茶の供給地は、元は宋園茶の産地である六大茶山であったが、時間の経過とともに北方の景東、さらにその西方に位置する双江と順寧に移動していった。この記述を裏付けるように、表2にも双江と順寧を筆頭として、景東の名も確認でき、さらには量的には少ないものの、雲県や昌寧などの新興茶山が挙げられている。

また、これら地域から四川に移出される普洱茶は、表2から推計すると、少なく見積もっても1.5万担以上にのぼり、清末の年間移出量7,200担と比較すると、2倍以上に増加している。

つづいて、チベット向けの普洱茶であるが、その生産地は、瀾滄・仏海・五福・思茅などメコン川西岸地域に集中している。1910年代、辛亥革命の余波にともなう雲南省内の治安悪化の影響により取引量は伸び悩んだ。しかし、後述するように英領インド帝国経由のルートを開発したことで、1920代以降は急速に増

19 19世紀末にリヨン商工会議所が組織した調査団の報告によると、1897年に思茅経由で移出された普洱茶40,000挑（約16,000担）の内訳は、四川省18,000挑（約7,200担）、チベット約11,000挑（約4,400担）、雲南省10,000挑（約4,000担）、貴州省600挑（約240担）、広西および広東はわずかに400挑（約160担）であった（Chambre de Commerce de Lyon 1898: 139）。

20 『海関十年報告 1912-1921年』には、情報源を普洱道の行政事務を掌る道尹であると記したうえで、普洱茶の年間生産量は35,000担に達し、ここから英領インド帝国のシャン州（British Shan States）向け4500担、仏領インドシナ連邦のラオス（Laos frontier）向け1,000担、さらに地元消費分2,000担を差し引いた27,500担のうち、60～70%が四川に運ばれ、約10%がチベットに向かい、残りは雲南で消費されていたとある（*Decennial Reports*, 1912-21, Vol. 2. Szemao, 372-373）。また、『雲南経済』第12章には、「滇省所産之茶、除銷本省外、以銷四川西藏為大宗、開銷安南、暹羅、緬甸及南洋以及沿海沿江各省」とあり（張 1942: L5）、依然として四川、チベット向けが多くを占めている。

21 『続雲南通志長編』巻72には、「以川銷茶之消長言：初為宋園茶（即大山茶），繼為景谷茶（景東属之景谷街），今則大部取之于双江、順寧，是皆滇茶發展趨向之明征也」とある（雲南省志編纂委員会辦公室 1985: 下冊、606）。

表2 民国期普洱茶の消費地と消費量一覧表

産地名	『雲南之茶業』（1934年出版）		『雲南経済』（1942年出版）		注記
	主要な消費地と移輸出量	取引額	主要な消費地と移輸出量	生産量	
瀾滄	昆明、緬甸、チベット（854担）	滇幣10,560元	—	3,000担	
仏海（猛海）	省内（2,000担）；チベット、緬甸、インド、仏領越南、暹羅（3,000担）	滇幣5、6万元	—	15,000担	
順寧	四川（3,200担）	—	省内、四川	8,000担	
鎮越（易武）	省内、緬甸、暹羅、英領整海、仏領越南萊州、香港（2,600担）	—	思茅（一部）、越南（一部）	4,000担	
五福	省内（100余担）；チベット、上海（70-80担）	—		—	
双江	四川叙府（10,000担の大部分）；緬甸、臘戌（Lashio）、中甸、維西（少量）	—	四川、省内（80～90%）；緬甸（10～20%）；猛定、耿馬、施甸、保山一帯（極少）	11,000担	
鎮康	—	滇幣1万余元	—	800担	
江城（猛烈）	仏領萊州（600担）	滇洋1千余元	越南（大部分）	2,000担	水運による輸出が可能。
雲県	四川叙瀘一帯、チベット（600担）	—	—	600担	
大関	昭通、塩津（30担）	—	多くは地元で消費	1,600余担	
彝良、綏江、鎮雄、塩津	—	—			
昌寧	—	—	省内、四川	300担	順寧に隣接する新興茶区
景谷	昆明（2,000担の大部分）	滇幣4万元	四川、省内	12,000担	
景東	昆明、大理など（11,350担）	—			
鎮沅	—	—	大半が香港と広州各地	2,000担	
元江	省内、香港（2,000担）	—			
緬寧	—	—	大半が雲県と下関を経て四川	4,000担	
思茅（倚邦）	省内、チベット、西康、インド、緬甸、シンガポール（4,000余担）	滇幣50万元	—	—	
車里	—	—	—	8,000担	
南嶠（猛遮）	—	—	—	6,000担	
寧江（猛往）	—	—	—	8,000担	

史料典拠：褚 1934: 182-183; 張 1942: 第12章 L2-L5。

加傾向を示すようになる。英領インド帝国を経由した輸出量に関しては、譚方之著の「滇茶蔵銷」に「仏海商会主席報告」を引用した記録が残されており、これをまとめたのが次ページに見える表3である。

1928年に5,000担に過ぎなかった輸出量は、1932年に飛躍的な増加を示して以降も、年々増加の一途を辿り、1938年には18,000担に達した（表3）。これを裏付けるように、1939年に民国政府のコルカタ総領事が、英領インド帝国を経由して毎年3.5万から4万包の普

洱茶がチベットに運ばれていたと報告している²²。

最後に、雲南省内の消費量について検討していく。19世紀末に4,000担であった雲南省内の消費量は、民国期には四川やチベットなどと同様に増加傾向を示すこととなる（表2）。残念ながら、史料上に消費量の正確な数字は記載されていない。しかし、普洱茶の年間総生産量を8万担と仮定し（表1）、四川省向けの約1.5万担、チベット向けの約1.8万担、仏領インドシナ連邦および香港向けの約0.3万担をそれぞれ差し引

²² 1940年5月9日「外交部為駐加総領事館與印交涉免抽過境茶稅事致蒙藏委員會公函」添付の「領事館布告」には「査雲南仏海茶磚仮道緬印運銷西藏者、毎年統計約在三万五千包至四万包之間」とある（劉 2005: 294-295）。

表3 仏海県のチベット向け普洱茶取引量と価格単価表

年代	数量(担)	産地毎担価格 (元：半開銀元)
民国17(1928)年	5,000	8
民国18(1929)年	5,600	10.5
民国19(1930)年	6,000	8
民国20(1931)年	6,500	9
民国21(1932)年	10,000	9.5
民国22(1933)年	11,000	9
民国23(1934)年	12,000	9
民国24(1935)年	13,000	11
民国25(1936)年	15,000	12.3
民国26(1937)年	15,500	12.6
民国27(1938)年	18,000	14.6
10年平均数量	11,700	13.2

典拠：「仏海商会主席報告」（譯 1944: 54-55）より抜粋。

けば、省内の消費量は約4万担であったと推計される²³。

民国期の雲南省では、茶は唯一の飲物として親しまれ、来客があればお茶でもてなした。また、茶を嗜みながら、様々な趣向を凝らした娯楽を提供する茶舗が一般民衆の間で人気を博し、飲茶の習慣が日常生活に溶け込んでいた²⁴。茶が広く飲まれるようになったことで、消費量が増大したのである。

雲南省における普洱茶の消費拡大の背景には、海関設置にともなう対外貿易の拡大と馬幫による物資輸送の活発化がある。蒙自・思茅・騰衝に海関が開設された後、雲南各地に中継市場が形成され、省都昆明がこれらの交易路の結節点となった。昆明には、生み出される経済的利益に魅かれて湖南省や四川省から多くの商人が移り住み、店を構えた。昆明の発展は都市人口の増加にも現れており、清末には9,754戸で95,235人だった人口が1932年にはそれぞれ31,029戸、143,700人に達した。このような省内外の交易拡大と商業活動の活性化が、滇西の大理や滇南の建水などにおける商人グループの形成を促し、人々の往来や交流を一層進めたことで、昆明を中心とする雲南省内の茶の消費を下支えたのであろう（石島 2004: 21-22、130-131）。

如上のように民国期の普洱茶生産拡大の背景には、清末から続く四川とチベットという二大消費地に加え、雲南省内や中国沿岸地域での消費の増加が寄与したことが挙げられる。

2 消費地と生産地をつなぐ物流

本節では、消費地を中心に、各地の生産地との間を結ぶ物流について検討していく。具体的な事例を取り上げ、論じていく前に、物流と交通機関に関して説明を加えておく。

(1) 物流と交通機関の定義

物流とは、一般的に生産者から消費者にいたるまでの商品の流れのことを指しており、輸送・保管・荷役・在庫管理・情報管理などが含まれている。このうち輸送活動が線部分で遂行される以外は、すべて結節部分で処理される（山本・奥野・石井・手塚 1997: 392）。起伏の激しい内陸に位置する雲南省では、この線部分に相当する輸送という関数が平地に比して物流全体をより大きく左右する要素となる。貨物を目的地に迅速かつ安全に届けることを目的とする輸送活動には、人や財貨の空間移動を可能にする手段方法が整備体系化された交通機関の存在が前提となる。

交通機関には、通路（道路・航路・鉄道路・航空路など）、運搬具（人・家畜・馬車や荷車などの車輛・自動車・筏・舟・船舶・汽車・電車・航空機など）、動力（人力や畜力・風力・水力・蒸気力・石油燃料爆発力・電力・原子力など）の3要素がある（青野・保柳 1951: 212-213）。

清末民国初の雲南では、交通機関を構成する各要素が変化する過渡期を迎えていた²⁵。通路は、茶馬古道の一部が、鉄道路や自動車道路に取って代わられた。同様に、通路を利用する運搬具も、牛馬などの荷役動物や人足から蒸気機関車や自動車に転換しつつあった。これにともない、動力においても人力や畜力、風力などの自然的動力から蒸気力や石油燃焼爆発力などの人工的動力に移行する傾向にあった。とりわけ、蒸

23 楊志玲氏は、1930年8月の中国茶業公司雲南辦事処の電報に基づき、省内の消費量は3万担余りであったとしている（楊 2009: 103）。

24 「雲南之茶業」五 茶之消費情形には、雲南の飲茶の習慣について「茶為本省人民唯一之飲料，不論公私团体住宅，莫不置茶，客至即以茶餉客。茶之濃淡，因嗜好而不同，但無換糖者。茶舗為本省一般民衆娛樂場所之一，其在鄉村，則有「公茶舗」者，且負有一村會議事項集合場所之使命焉。普通茶舗有「閑茶舗」與「困鼓茶舗」之分，後者乃集合芸伶唱戲娛客，唯不化裝，前者則茶舗主人不設零外娛樂，聽客暢談者。此外尚有備留聲機或請人演述說部以娛客者」とある（褚 1934）。

25 『雲南經濟』第12章には、「滇茶運輸路線，大別為南北兩途，什九賴乎駝馬，間資水道、火車、汽車者」とある（張 1942: L5）。

気力や石油燃焼爆発力という人工的動力の導入は、運搬具と動力源を分化することで自然的制約から解放することとなった。これは、それまで運搬具と動力源が一体化していた「背夫」や「馬幫」などの人足や牛馬に依存せざるを得なかった雲南の交通事情に、長足の進歩をもたらすこととなった。

この中で、蒸気機関車を導入した滇越鉄道の全面開通による輸送条件の改善は、冒頭で述べた通り、大量輸送の実現によって雲南の貿易に極めて大きな影響を及ぼした。

また、蒸気力の活用は、陸の世界にとどまらず、海の世界にも及んだ。19世紀半ば以降、東アジア海域に欧米の汽船が進出し、中国帆船を主体として構築されてきたアジア海域の物流の輸送形態に大きな変革をもたらした（松浦 2014: 3-18）。人工的動力を持つ汽船は、自然的動力である風力任せの帆船に比して、天候に左右されることが少なく、輸送の定時性が飛躍的に高まった。

滇越鉄道を通して仏領インドシナ連邦経由で香港に通じる交易路を持つ雲南省にとって航路における運搬具の動力の変化は無関係ではなかった。従来の陸路では、昆明から内陸水運の中心である長江流域に位置する四川省叙州まで商品を運ぶだけでも20日以上要していた。しかし、滇越鉄道を利用し、ハイフォンから汽船を使うことで、香港まで6、7日、上海までも9日で到着することが可能となり、運搬量も大幅に増加した（石島 2004: 57）。

如上のように蒸気機関という人工的動力を活用した汽車や汽船は、人力や畜力と異なり病気や天候の影響を受けにくいため、予定通りに大量かつ安全に人や財貨を目的地に移動させることを可能にした。清末民国初の交通機関の発達、雲南省の物流における輸送に革新的な変化をもたらした。

(2) 新たな交通機関の登場と物流ルート

ここでは、清末民国初における普洱茶の需要が高まった消費地に注目し、生産地との連携を強化するための新たな交通手段が重要な役割を果たした物流ル

ートについて考察し、消費の拡大との関連性を検討していく。

A 仏領インドシナ連邦と香港

最初に、滇越鉄道によって世界市場との経済的つながりを深めつつあった仏領インドシナ連邦および香港などの巨大な人口を誇る中国沿岸部の消費地を取り上げる。清末民国初から新たな消費地として急速に台頭した当該地域には、六大茶山である鎮越（易武）を中心として仏海・江城・元江など周辺部の茶山からも供給された（表2）。

物流ルートとしては主に二つあり、一つが易武や倚邦などの六大茶山から、黒河を下り、北ラオスおよび北ベトナム萊州経由で輸出されるルートと、もう一つが蒙自海関を通過し、トンキン（北ベトナム）、さらには船舶で香港に輸出されるルートがあった（西川 2015: 224）。江城からも「江城（昔の猛烈）は年間約2,400担の茶を生産し、そのほとんどはベトナムに輸出されていた。雲南の茶の輸送に水路を使用できるのは江城だけである」とあり、仏領インドシナ連邦には水運でもって運ばれた²⁶。

地理的にはいずれの地域も仏領インドシナ連邦に隣接しており、物流のコスト面を鑑みれば、普洱茶の輸出には適していたといえよう。

また、1910年に滇越鉄道が開通して以降、安価で迅速な大量輸送が可能となった。次ページに見えるグラフ1は、蒙自の海関史料に基づき1889年から1928年までの普洱茶の輸出量と輸出額を示している。

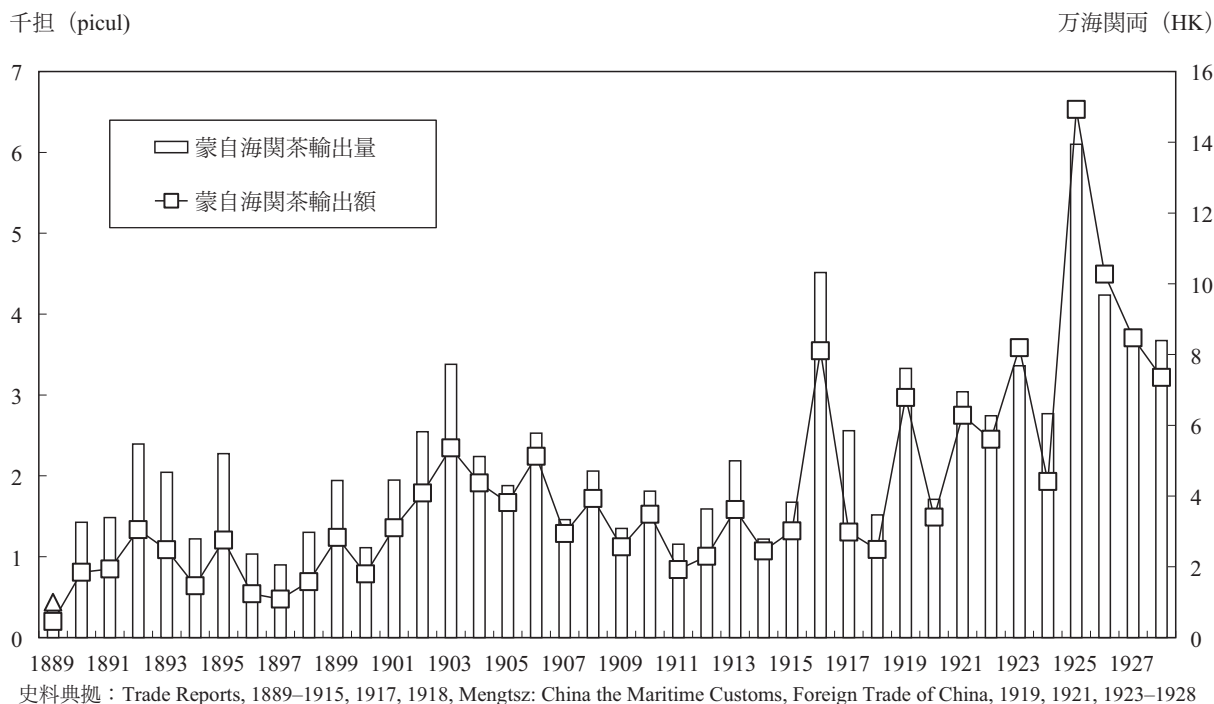
グラフ1から、滇越鉄道の開通により仏領インドシナ連邦と接続され、1916年以降、輸出量はしばしば3,000担を超え、1925年には6,000担を上回る記録を達成したことがわかる²⁷。加えて、購買力のある香港などの中国沿岸部には、易武などから単価の高い高級茶が輸出されており、利益を生み出しやすい構造があった²⁸。

仏領インドシナ連邦や香港を含む中国沿岸地域向けの普洱茶は、鉄道敷設により従来の家畜や人足による輸送手段から脱却し、大規模な輸送が可能となった。その結果、世界市場に向けて安定的に普洱茶を輸出することが実現した。

26 『統雲南通志長編』巻72には、「江城（即旧時之猛烈），年産約二千四百担，大部運銷越南。滇茶運輸之可資水道者，惟江城一渠耳」とある（雲南省志編纂委員会辦公室 1985: 下冊、607）。

27 グラフ1に見える当該時期の蒙自海関の普洱茶の輸出の増減に関する詳細については、拙著（西川 2015: 226-228）を参照されたい。

28 『雲南省事情』其一には、昆明における普洱茶の各種市場価格が紹介されており、百斤あたり、上倚邦75元・中倚邦70元・上易武66元・中易武55元・寶紅（紅茶）40元・上攸楽62元・中攸楽55元・元江茶（上猪街茶）37元・景谷茶（景谷春茶）48元とあり、倚邦や易武の茶の価格の高さが際立っている（台湾総督府官房調査課編 1924: 143-144）。



グラフ1 蒙自海関の茶輸出量と輸出額 (1889-1928)

B 四川省と昆明

次に四川省および省都昆明向けの普洱茶の物流について説明していく。前述したとおり、四川省に供給する普洱茶の生産地は、古くは六大茶山に始まり、時間の経過とともに景東、双江、順寧と移動を繰り返した。これに加えて、雲県や昌寧からも四川に移出されている(表2)。

順寧・雲県・緬寧・双江県で収穫された茶葉は、荷馬で下関(大理)や昆明に運ばれ、沱茶に加工された後、四川省やチベット地域に輸送され、販売された(図2)²⁹。また、景東と景谷産の四川向けの茶葉は、昆明まで運ばれて販売されるか、あるいはそこから四川に向かう。前述の通り、省都昆明は、海関設置以来、外国貿易を中心として雲南経済が活性化する中で交易路の結節点の役割を果たしており、普洱茶の大消費地でもあったため(表2)、ここで一度販売された後、四川に運ばれたのであろう。

また、ここで注目すべきは、両ルートにおいて、荷馬を用いて下関または祥雲まで運搬された後、昆明まで自動車を利用され、その後、自動車道路が四川省叙府まで延伸されていることである。雲南における自動

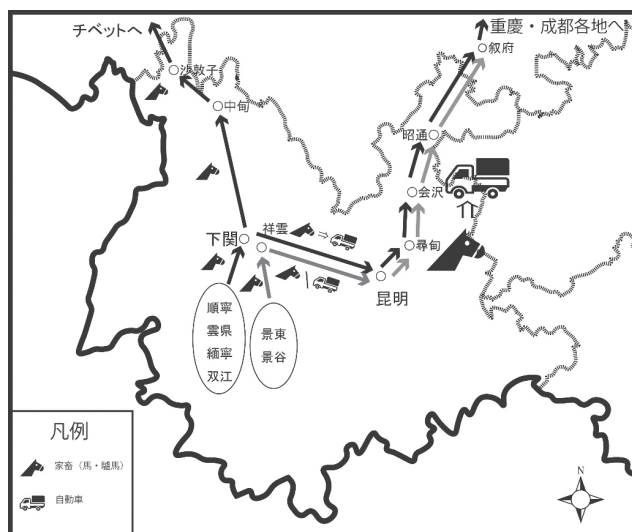


図2 チベットおよび四川向けの普洱茶の移出ルート

車道路建設は、1929年に公路局が設立されたことを契機に本格化した。省都昆明から滇西の中心である下関までの工事は1924年に着手され、1935年12月に全線が開通した(陸 1997: 405-406)。この開通により、2日間で昆明と下関間の移動が可能となった(支那省別全誌刊行会 1942: 323-326)。その後、昆明を起点に

²⁹ これら生産地に普洱茶を運ぶ物流ルートに関しては『雲南経済』第12章に「凡順寧、雲県、緬寧、双江等県所産、大抵由産地駄運至下関昆明、(下関至昆明近間以車運)両地。除銷本省之散茶外、多数製成緊茶、名曰沱茶、運至四川之叙府(即宜賓県)、分銷重慶成都各地;或由中甸維西經沙敦子以入康藏。其產自景東景谷者、或以駝馬運至昆明、或至祥雲改裝汽車、至省銷售、川銷向由昆明駝運至叙府、自叙昆路通車後、亦有汽車者」とある(張 1942: L5)。

各方面への自動車道路整備が進められ、省外へと延びる道路が次々に建設された。1937年に昆明から曲靖を経て東方の貴州を結ぶ滇黔公路が開通し、1938年に昆明から霑益まで滇黔公路を進み、宣威、貴州省威寧および畢節を通り、四川省の瀘州にいたる川滇東公路が完成を見た。また、同年には下関から西方のミャンマーのラショー（Lashio）へと延びる滇緬公路、1940年に昆明から南下し蒙自を経由してベトナムにいたる滇南公路がそれぞれ開通した（増田・加藤・小島 2008；東亜同文会支那省別全誌刊行会 1942: 323-330）。さらに、昆明から滇黔公路を進み、途中の楊林で分岐して北上し、尋甸、会沢、昭通、塩津を経て四川省叙府にいたる川滇中公路は、1940年2月に全線が開通した（東亜同文会支那省別全誌刊行会 1942: 328）。一連の工事により、下関と昆明間は1935年末に、昆明と四川省叙府間は1940年2月に、それぞれ自動車による輸送が可能となった（図2）。

交通インフラの整備により、人工的動力を用いた自動車の利用が実現したことは、物流において革新的な変化をもたらした。ただし、家畜や人足とは異なり、運搬具と動力源を分化した自動車を動かすには、燃料の安定的供給が不可欠であった。この点における環境整備は容易ではなく、燃料不足が原因で自動車による輸送が制限されることもあった³⁰。

四川向けの普洱茶の輸送の手段は、1930年代半ば以降本格化した交通インフラの整備にともない、燃料不足という制約を受けながらも、従来の荷馬から自動車へと移行していった。

C チベット

最後に伝統的な普洱茶の消費地であるチベットについて取り上げる。最初に、生産地である雲南省南部とチベットを結ぶ物流ルートの変化を明らかにしたうえで、これにともない生じた問題についても検討していく。

a 物流ルートの変化

民国期にチベット向けの普洱茶の供給地となったのは、六大茶山の一つである倚邦や仏海を中心に、雲県、瀾滄などのメコン川流域であった。

明代においては、チベットでは、四川省雅安や灌県で栽培された茶が消費されていた。しかし、明末清初の四川を巻き込んだ混乱と戦争の時期を境に雲南省が新たな茶の供給先として台頭してくる（劉 2017）。

さて、チベットに普洱茶が運ばれるルートは、1920年以前は大理から北上して徳欽を経てチベットに入る北ルートが主流であった（図2）。しかし、民国初期の治安悪化を契機に新たに現在のミャンマー、インドを経由する南ルートが開発され、北ルートは徐々に衰退に向かう（図3）。このときの詳細な事情については、1930年代に仏海にて教育局長を務め、自らも茶荘を経営していた李弘一が（黄 2009）、次のように記している³¹。

中華民国の建国以降、内紛が頻発し、四川省と雲南省の間で絶えず戦争をしていたため、交通が遮断され、道路も安全でなくなり、普洱茶の売行きも大きな打撃を受けた。年に2回、チベット人が思茅で買いつける緊茶の量も激減した。ここ10年、洪盛祥・

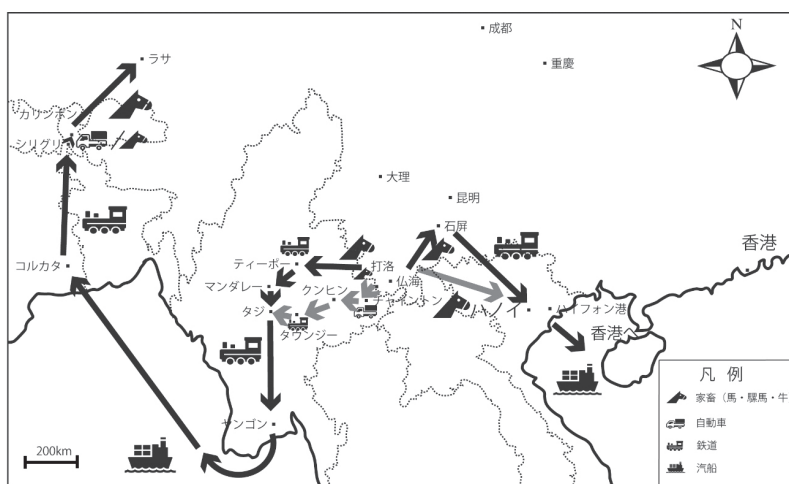


図3 チベットおよび香港向けの普洱茶の輸出ルート

30 とりわけ1940年代は、戦争の影響もあり、燃料の供給は十分ではなく、自動車の使用はかなり制限されていたようであり、1944年刊行『中農月刊』に掲載の「雲南之沱茶」には「由下関至昆明駄運十二天…惟近年以来以汽車燃料限制車運甚少。由昆明經曲靖入四川畢節轉叙府駄運時日十八天…惜以汽車限制，多数未能用汽車載運，而以長途駄運為主，其影響品質殊大」とある（唐 1944）。

31 1931年刊行『新亜細亞』に掲載の「西藏與車里之茶業貿易」には、「光復以来，内乱頻仍，川滇兩省，不時發生戰過，交通梗阻，道途不靖，普茶銷路，不免大受打撃。就是藏人一年兩度到思茅購買之緊茶，亦復大為減色。近十年來，如洪盛祥，義和祥，恒盛公，可以興等茶莊，因鑑于内地道途之不便，運輸之困難；先後到猛海（即今仏海縣治）方面成立工廠，將土人粗製品就地改為藏莊，假道緬甸，印度，由加爾各打經大吉嶺，加倫埠直達後藏拉薩一帶銷售；或即在印度售與藏商，移銷入内」とある（李 1931）。

義和祥・恒盛公・可以興などの茶荘は、内陸の道路の不便さと輸送の困難さを鑑み、相繼いで猛海（＝現在の仏海県）に工場を設け、土着民の粗製品をその場でチベット茶荘のものに改め、ビルマ、インドを経て、コルカタからダージリン、カリンポンを経由して直接チベットに入り、後蔵（チベット西南部）やラサールで販売する、あるいは、インドでチベット商人に販売して、輸入されるかのどちらかである。

辛亥革命以降につづいた護国戦争などの政治的不安の影響を受け、北ルートが遮断されたために、複数の茶荘が猛海（仏海）に工場を建設し、思茅を経由することなく、直接南に向かい英領インド帝国に属するミャンマーやインド経由でチベットに輸送するようになった。

この南ルートに関する具体的な経路については、『雲南経済』に1940年頃の次のような記録が残されている³²。

仏海・南嶠・車里などで産出される茶は、阿敦子（徳欽県）からの道が塞がって以降、最初は、瀾滄の孟蓮土司の地から、ミャンマー西北部に出て、到着した北部の中心である錫箔（ティーポー Hsipaw）において鉄道に積み込まれ、西南方向に運ばれ、瓦城（マンダレー Mandalay）を経て、大市（タジ Thazi）から仰光（ヤンゴン Yangon）に達する。船に積み替えられた後、3、4日で加爾各答（コルカタ Kolkata）に到着し、鉄道で西哩咕里（シリグリ Siliguri）に移動、そこで牛車あるいは自動車に乗り換える。到着した加麟崩（カリンポン Kalimpong）で、再度驛馬に積み替えられチベットに向かう。これがかつての仏海から西藏へ向かう唯一のルートであった。ついで、滇緬公路が公信（クンヒン Kunhing）まで開通した後、この西北ルートは放棄された。そして、改めて、仏海から荷馬で国内の打洛、さらにミャンマーの景東（チャイントン Kyaingtong）まで運び、自動車に積み替え、クンヒン（Kunhing）に向かい、（タウンジー Taunggyi の）瑞仰に到着後、

鉄道に乗り換えてタジにいたる。タジからヤンゴンに到着後、コルカタを通して、チベットに向かうことになる。

この説明によると、雲南南部の茶山地域に近いクンヒンに滇緬公路がつながったことを契機として、南ルートは前期と後期の二つのルートに分けられる。前期ルートは、雲南省瀾滄から、ミャンマー西北部のティーポーに向かい、そこから鉄道に積み込まれ、マンダレー、タジを経由してヤンゴンまで運ばれた。クンヒンまで道路が開通した後期ルートは、打洛からチャイントンまで荷馬で運んだ後、自動車に積み替えてクンヒンを経て、タウンジーに赴く。そこで、再度鉄道に積み直してタジを経由してヤンゴンに向かう。

ヤンゴン到着後は、両ルートともに、船で英領インド帝国のコルカタに移動し、鉄道に積み替えてシリグりに赴く。そして、牛車や自動車に乗り換えカリンポンに向かい、再び驛馬に積み替えてチベットに入る（図3）。

ヤンゴンとコルカタを結ぶ航路では、1863年にブリティッシュ・インディア汽船会社による直通の定期航路がすでに運航を開始していた（澤 1985）。南ルートが開発された当時、ミャンマーとインドはいずれも英領インド帝国に属しており、領内の往来は容易なうえ、鉄道や航路など交通インフラの面でも恵まれていた³³。したがって、南ルートは、雲南からミャンマー西部に運び出す路程と最後のヒマラヤ越えを除き、いずれも人工的動力を備えた自動車、鉄道および汽船を駆使して、輸送されていたことになる。畜力や人力による北ルートから、路程の大部分を人工的動力に依拠する南ルートに移行したことは、輸送の速度や効率性において格段の差を生み出した。

民国政府の官員で民国27（1938）年3月から翌年2月まで重慶から雲南に派遣され、雲南省政府主席の龍雲のバックアップのもと経済調査を実施した郭垣は（郭 1940: 1）、畜力と人力による北ルートと南ルートで実際に費やされる日数に関して詳細な記録を残しており、これを整理したのが以下に示す表4である。

南ルートは、北部シャン経由が46日、クンヒン経

32 『雲南経済』第12章には、「凡仏海、南嶠、車里等地所産之茶；自阿敦子一途阻塞後，初由瀾滄之孟蓮土司地，出緬甸西北，至緬屬北部中心之錫箔，載上火車，西南經瓦城，由大市（Thazi）而達仰光，換船約三四日至加爾各答，由火車至西哩咕里，換牛車或汽車至加麟崩，又改用驛馬入藏，此過去仏海藏銷唯一之出路也。嗣以滇緬公路通至公信（亦作貴興），遂捨西北一線，改由仏海駢運出打洛（屬我國），至緬甸之景棟口（即猛良），換汽車至公信，達瑞仰，換火車至大市，達仰光，循加爾各答入藏」とある（張 1942: L5）。

33 ビルマの鉄道輸送については、（柿崎 2022）を参照されたい。

由が51日とそれぞれ移動日数が必要となる（表4）。ただし、郭垣が調査した当時は、滇緬公路がクンヒンまで延伸されておらず、移動手段は依然として家畜によっていた。『雲南経済』に見えるように、南ルートの後期ルートにおいて、クンヒンから自動車を利用してシャン南部を横断し、タウンジーの瑞仰で鉄道に積替えが可能となったことにより、クンヒンから鉄道沿線までの移動日数は、従来の16日からさらに数日間に短縮されたと考えられる。一方、思茅から大理、麗江を経由して、チベットにつづく茶馬古道を進む北ルートは、移動日数には単純計算で79日間必要であり、往復の日程を加味すれば、半年近くかかることとなる³⁴。加えて、家畜と人足に依存していたため、病

気や天候などの不確定要素も大きかった。

以上のように南北両ルートを比較すれば、輸送手段を家畜に頼った北ルートは、往復で半年要した。これに対して、南ルートでは鉄道と汽船を軸として、後には自動車加わる形で、路程の大部分を、人工的動力を持つ運搬具に依拠することにより、安価でスピーディな長距離大量輸送が実現し、規則性をもった物流ルートを確保することができた。

大量輸送によるコストの抑制に加えて、南ルートには、関税の面でも大きなメリットがあった。1894年3月1日に清朝とイギリスの間で「統議滇緬界・商務條款」が締結されたことによって陸路でミャンマーに運搬される貨物は、塩を除いて税金の徴収は免除された³⁵。

表4 チベットルートの路程と移動日数

南ルート					北ルート	
前期ルート		後期ルート		移動手段と距離	地名	移動日数
地名	移動日数	地名	移動日数			
仏海		仏海			ラサ	
↓	23日	↓	9日	家畜	↓	40日
猛阿		景東（孟良）			阿墩子（徳欽県）	
↓		↓	3日	家畜	↓	12日
シャン北部		クンヒン			中甸	
↓		↓	16日	家畜	↓	
ティーポー		ティーポー			維西	
↓	3日	↓	3日	鉄道（501キロ）	↓	
ヤンゴン		ヤンゴン			麗江	
↓		↓		船（723カイリ）	↓	15日
コルカタ		コルカタ			景東	
↓	8日	↓	8日	鉄道（335マイル）	↓	12日
シリグリ		シリグリ			思茅	
↓		↓		牛車（約10マイル）		
カリンボン		カリンボン				
↓		↓		家畜		
亜東県帕里鎮（Pagri）		亜東県帕里鎮（Pagri）				
↓	12日	↓	12日	家畜		
ラサ		ラサ				
	計46日		計51日			計79日

史料典拠：郭 1940: 212-214。

34 チベット人が雲南を往復する路程については、『雲南省之自然富源』第7章に「蔵人先由阿墩子、中甸、維西、麗江等処、南来思茅輸運、蔵人分春夏秋冬四季；春至思茅、冬則直趨仏海。拉薩至阿墩子計馬程四十日；由阿墩子至麗江十二日，再至景東十五日，至思茅十二日。跋涉万里，往返数月，交通之困難，於此可見」とあり、万里を歩くため、往復には数か月を要する（郭 1940: 214）。

35 「統議滇緬界・商務條款」の第八条には「英国極欲振興中、緬陸路商務，答允自条約批准之日起，以六年為期，中国所出之貨及製造之物，由旱道運入緬甸，除塩之外，概不収税」（王 1957: 578）とあるものの、実際には、「滇茶蔵銷」（五）緊茶蔵銷に「依拠滇緬通商条約，凡陸路進緬之貨物，概可免税…但于三十年四五月間，印度海関頒布進口抽税法令之後，茶葉須抽税五安，每包緊茶須納税十九羅比」とあるように免税処置が1941年まで継続された（譚 1944）。

南ルート開発にともなう人工的動力を活用した物流ルートの獲得は、時間的に年2回に買い付けが制限されていた北ルートに比して、定期的輸送が可能となり、取引量の飛躍的増加につながった(表3)。

b イギリスの対チベット政策とインド商人

普洱茶の消費量が増加した原因は、物流コストの抑制や物流の効率化だけではなく、イギリスの対チベット政策も関係していた。

巨大な茶の需要を誇るチベットの茶市場には、イギリスも注目していた。中国からの茶の輸入による銀の流出に苦しんでいたイギリスは、19世紀半ばアッサムにおいて茶の栽培に成功、1860年代にはネパールやスリランカにまで茶園を拡大し、イギリス本国向けに輸出を開始した。しかし、まもなくイギリス本国の茶市場は飽和状態となり、新たな市場の開拓が必要となった。そこで、目を付けたのがチベットであった。19世紀末頃からチベットに対する軍事的圧力を強めていったイギリスは、最終的に1908年にインド茶の輸入を認めさせた(劉 2017)。

しかし、イギリスが当初企図したようなインド茶によるチベット市場の独占は容易ではなかった。交通インフラの整備により、廉価なインド茶が流入したことは、従来チベット向けに茶を供給していた四川茶の移出に大きな影響を及ぼし、辛亥革命以降、四川茶は、交通状況の悪化や価格の高騰が重なり、チベットでの消費量が減少した。その結果、予想に反して普洱茶の消費量が増加することとなった。南ルートを通じて輸出される普洱茶は、英領インド帝国内の交通インフラを活用することで物流コストを抑え、関税が免税であったことも相まって、四川茶に代わりインド茶とともにチベット市場で台頭することとなった(劉 2017；

2021)。これには、普洱茶がバターと相性が良く、チベット人に好まれたことも関係していた。チベット人が好むバター茶には普洱茶の茶葉が適しており、その体を温める効果は寒冷地において非常に有用であった³⁶。普洱茶は、イギリスの対チベット政策と整備された交通インフラに乗じてチベットにおける普洱茶市場の拡大に成功したのである。

ただし、雲南西北部を通してチベットに向かう北ルートから、ミャンマーとインドを経由する南ルートへの変更は、普洱茶取引においてインド商人の干渉を許すという副次的な影響をもたらした。

そもそも仏海では、茶の生産から販売までの流通について、大きく分けて茶販・茶号・茶行の三種の業者が担っていた。まず茶の農家から茶葉を買い集めるのが茶販であり、茶号が、茶販から茶葉の買い付けをおこなった。ただし、季節によっては茶号自ら茶山に茶葉を買いに行くこともあった。茶号は、収集した茶葉を加工したうえで、下関や昆明まで運び、茶行を通してあるいは自分で販売をおこなった。さらに資金の面でも茶号の役割は大きく、茶農家から茶葉を受け取るために、茶山の村々の顔役に手付金を支払う責任を負っていた³⁷。したがって、茶号は、物流から資金の流れまで流通経路の大部分に深く関与していた。

南ルートの開発は、1918年にこの地で緊茶の生産を始めた茶号である雲和祥に由来し、まもなくして新たな参入者が相継いだことで、熾烈な競争が展開されることとなった³⁸。この頃の状況と影響については、譚方之著の「滇茶藏銷」に次のように記している³⁹。

雲南の茶がインド経由でチベットに持ち込まれるようになるのは、民国7(1918)年であり、一部の

36 李弘一は、「西藏與車里之茶葉貿易」の中で「我記得有人這樣說過『西藏所需茶葉，自來都是由川輸入，近來被印度茶將銷場奪去了。』其來這種茶就是由車里猛海運去之普洱茶，真正印度產之茶葉，藏人是不歡迎的。拋他們說來，普洱茶葉（即指一般所謂之爛茶）能夠與酥油融和，可以增加體溫，能令冬天不怕寒冷」と記している(李 1931)。

37 仏海における流通の詳細については、「滇茶藏銷」(四)緊茶販売の中で「緊茶原料之毛茶，在生産地收購者，大都由茶販茶客茶行經手，茶販多為一種販客性質之馬幫任之，彼等每屆茶季，自數百里或數千里外，購辦大宗日用品，攜帶武器，結隊趨赴茶葉產地，購茶售貨，或行易貨，以運至製茶地出售，此種茶販，約占茶葉販賣商中百分之二十五……茶客與茶号收購馬幫之茶，或在茶季時，入山採辦，運至滇西下関，滇中昆明，經茶行或直接售出，茶行居中得百分之三之手續費，但須負貨款及墊款之責，茶客與茶号在製茶一二月前，以現款向近處產茶各村寨頭人土司定買，付定銀後，可自由向茶農取茶，而漫無限制，故每有茶号，負茶農茶款之責。茶号占有百分之八十，其在產地收購毛茶之外，兼行自製」とある(譚 1944)。

38 1938年に仏海を訪れた姚荷生は、仏海の茶号について「從前十二版納出產的茶葉先運到思茅普洱，製成緊茶，所以稱為普洱茶。西藏人由西康阿登子經大理來普洱購買。民国七年雲和祥在仏海開始製造緊茶，經緬甸印度直接運到西藏邊界葛倫舖賣給藏人，賺到很大的利益。商人聞風而來，許多茶莊先後成立。現在仏海約有大小茶号十餘家」と記録している(姚 1948: 144)。

39 「滇茶藏銷」(五)緊茶藏銷には、「滇茶之經印入藏，在民国七年，始有商人經營，獲利甚厚，民国十四五年後，商人之繼起經營者頗多，惟多少資本經營，運費甚巨，抵仰後，多因資本欠乏，運輸困難，加以語言文字之隔閡，推銷為難，□□除洪記号及恒盛公茶号外，餘均轉售印商，經銷印藏，惟以價格受印人操縱，營業時有虧損」と詳細に記しており、價格の決定についても「至滇茶運出銷售價格，以在加爾各答為標準」とある(譚 1944)。

商人がこの事業を始め、多くの利益を得ていた。民国14、5（1925-26）年以降、この事業に参入する商人が相継いだ。ただ多くは少ない資本で経営しており、輸送費が非常に高額であったため、ヤンゴンに到着した後、資本不足により輸送が困難で、加えて言葉と文字が障壁となり、販売が容易ではなかった。洪記号と恒盛公以外のその他の茶号は、みなインド商人に転売し、インドやチベットでの販売をおこなった。もっぱら価格は、インド人によってコントロールされ、ビジネスは時に損失を被っている。

同業者間の競争が激化する中で、小規模茶号は高額な輸送費に苦しみ、言語の壁も影響し、多くがインド商人に茶を転売せざるを得なくなった。この状況は、普洱茶の取引において地理的な優位性を有するインド商人の関与を招き、販売価格がコルカタで決定されるようになった。その結果、普洱茶の価格決定権がインド商人に移行し、地元の仏海にある茶号の経営に深刻な影響を与えることとなった。

さらに、インド商人の影響は、販路のみにとどまらず、普洱茶の産地でもある仏海にも及んだ。以下に見える表5は、1930年代後半頃の仏海の茶号を分類したものである。

仏海の茶号は、資本規模から順番にインド・ミャンマー系茶号、仏海系茶号、それから零細茶号の3つに分類される。インド・ミャンマー系茶号は、インド商人との協力関係のもとで、加工から輸送、そして販売までを一手に担う。一方、仏海系茶号は、緊茶に加工はするものの、輸送はインド・ミャンマー系茶号に依

存しており、零細茶号にいたっては茶葉を買い集める以外の工程は、その他の茶号に任せている。

仏海では、インド商人の大規模な資本を基盤とするインド・ミャンマー系の茶業者のみが、茶葉の加工・輸送・販売にいたるまでの流通全体を把握している。そのため、地元の仏海を含むほかの茶業者は言語の障壁も影響し、輸送や販売においてインド・ミャンマー系の茶業者に依存せざるを得ない状況にあった。

また、チベットにおける普洱茶の人気を目の当たりにしたインド商人の中には、その名声を不正に利用しようとするものも現れた。譚方之の「滇茶蔵銷」には、これに関連して以下のような記載が見える⁴⁰。

近年、シリグリではインド茶商が密かに仏海の緊圧茶を模倣して製造している。これらの茶商が生産する茶葉は、外見が仏海の緊圧茶に似ているものの、茶葉の中心部にはカビが生え腐っており、チベット人が好んで飲まないため、仏海の小規模茶号の商標を詐称し、カリンボンまで輸送して混ぜて売っている。また、ダーズリン近郊では仏海の何がしという茶号の経理と結託したインドの茶商が工場を設立し、偽ブランドを製造しており、すでに成功を収め、年間生産量は1,000担を超えている。

仏海産の緊圧茶の模倣品を製造し、混合販売や偽商標の作成を通じて、インド茶を普洱茶としてチベット市場に流通させ、一定の成果を上げていたことが示唆されている。実際、1944年に康蔵貿易会社の総経理である格桑悦希がインド国境を調査した際に作成した

表5 仏海「茶号」の分類

	種類	事業主に関する情報	資本規模	具体的活動
1	インド・ミャンマー系茶号	インド・ミャンマー系移民とインド商人の合作。	巨大	仏海において設立された茶号で、購入した原料を緊茶に加工し、直接インドとチベットに輸送、販売をおこなう。
2	仏海系茶号	仏海の漢人と土司らによる合資。	脆弱	資本が不十分であるため、緊茶に加工することしかできず、輸送をおこなう能力が不足している。その結果、仏海でインド・ミャンマー系の茶号に売り渡すか、あるいは無理にヤンゴンやコルカタまで輸送しても、結局はインド・ミャンマー系の茶号に売却するにとどまる。
3	零細茶号	事業規模は極めて小さく、そのほとんどが1年限定で臨時的に設立される。	極小	周辺の茶山から茶葉を買い集め、インド・ミャンマー系や仏海系茶号に売却する。

史料典拠：譚方之 1944「滇茶蔵銷」（四）緊茶販売。

⁴⁰ 「滇茶蔵銷」（六）緊茶蔵銷之先決には、「近年来印度茶商，在西里古里（Siliguri）秘密仿製仏海緊茶，所出之茶，在外表觀之，雖與仏海産者相彷彿，但其中心多霉爛，且因藏人不喜飲用，乃假冒仏海中，小茶号之招牌，運至迦林崩混售，又在大吉嶺附近，印度茶商，勾結仏海某茶号經理，設廠仿製，已有成效，年産有千担以上」とある（譚 1944）。

「印茶銷蔵概況」では、主な商人として、インド商人が雲南沱茶700担を、イギリス商人が仏海沱茶2,000包をそれぞれ模倣製造しているとの報告がなされている⁴¹。チベットの茶市場では、インド商人との間で激しい競争が展開された。雲南の仏海の商人は、普洱茶の利益を巡って、国際的なネットワークを駆使し、商業に精通したインドの商人と直接対峙することとなったのである。

イギリスの対チベット政策と英領インド帝国内の交通インフラの整備に乗じた南ルートの開発は、物流業務の効率化を促し、取引量が増大するなど普洱茶生産に恩恵をもたらした反面、チベット向けの普洱茶市場に対する第三者の介入を招いた。具体的には、普洱茶がもたらす富は商才に優れたインド商人たちを魅了し、輸送と販売が彼らの手に委ねられた結果、価格決定権がインド商人に移行し、さらには普洱茶の模倣品であるインド茶の流通といった大きな副作用を引き起こすこととなった。

如上のように本章では、清末民国初の普洱茶の主要市場であった仏領インドシナ連邦と香港、四川省と昆明、チベットを事例として取り上げ、人工的動力を備えた運搬具の登場と影響について論じてきた。新たな運搬具は、遠隔地にも安全かつ迅速、そして、規則性をもって貨物を送り届けることを可能にしたことで、大量の生産かつ消費に適した効率的な物流が展開され、民国期の普洱茶市場の拡大に寄与した。だが、その一方で、英領インド帝国の交通インフラを基にした物流ルートの確立の事例が示すように、第三者の介入を引き起こす可能性があり、これが普洱茶取引に不安定性をもたらす要因ともなった。

このように人工的動力を内蔵した運搬具の導入は、生産地と消費地を機能的に結びつけ、普洱茶の消費拡大に寄与したことは間違いない。しかしながら、人工的動力を備えた交通機関の導入と物流の革新だけでは、清末民国初における新たな消費の掘り起こしや新規顧客の獲得に決定的な役割を果たしたとまではいえない。これらはあくまで潜在的な需要が存在する地域に対して、普洱茶の効率的な輸送を支援したに過ぎない。輸送手段の改善は、安価で安定した貨物輸送を実現するものであり、商品そのものの魅力を生み出すも

のではない。もし普洱茶の品質が低ければ、消費は依然として低迷していたであろう。

そこで、次章では、清末民国初の新たな消費の掘り起こしや新規顧客の獲得を促進した普洱茶の品質の向上について、技術の点から論じていく。

V 普洱茶の品質の向上と技術移転

清末民国初、普洱茶の需要増加にともない、茶の生産地域は、六大茶山から周辺地域に向けて拡大した。ただ根本的な問題として、新たな生産地で産出された普洱茶が、消費者を満足させるだけの品質を保証できなければ、市場での需要を維持することはできず、新規の消費者を獲得することも難しい。

そこで、本章では清末民国初における普洱茶の消費量拡大の背景にある茶の品質に着目する。普洱茶の品質の向上は、18世紀末頃から、貢茶の任を担うようになった石屏漢人による栽培加工技術が関係していたことはすでに述べた。ここでは、清末民国初において、石屏漢人が培ってきた茶の栽培加工技術が、技術移転を通じて各地で生産されるようになった普洱茶の品質の向上と維持に重要な役割を果たしていく過程を明らかにしていく。

具体例をあげて検討していく前に、技術移転について若干の説明を加えておく。ここでいう技術移転とは、技術自体と、その技術を使いこなす技能、両方を他地域へ移植する行為を指す。これは、時間軸で見れば、移転・定着・普及というプロセスを辿る。ただし、技術の移転と定着・普及は、本来異なった二つのプロセスであり、技術・技能が移転されたからといって、すぐに定着・普及するわけではなく、移転先でそれを支えるための技術・技能を有する職能集団が育成され、再生産されていく必要がある（ダニエルズ 1991）。

1 猛海における加工技術移転

最初にメコン川をはさんで六大茶山の西側に位置するシブソンパンナーの猛海（仏海）について検討していく。元来、猛海では粗放的な方法でタイ族やアカ族（現代中国の分類ではハニ族）の人々が茶栽培をしていた。彼らは、摘み取った茶を、天日干しのみの状態

⁴¹ 1944年7月4日「格桑悦希為印茶銷蔵事致吳忠信函」添付の「印茶銷蔵概況」には、「経営商号共有数家、其較著者、一為西日讓、印度人、設号地点在当生噶瑪（距亜東甚近）、製有磚茶、沱茶兩種。磚茶產量年約一百五十担、沱茶產量計七百担…二為茶商邦卡巴尼、英籍人、地点在卡相（大吉嶺山脚）、產量最初為一千包、現已達二千包。完全仿造仏沱茶、已有十年歷史」とある（劉 2005: 336）。

で定期市に持込み、それを漢人商人が買い集めて思茅に運び、そこで分類や混合をおこない、圧縮して様々な形に整えていた。これは、メコン川東岸の易武や倚邦ではその場で加工し、商人と取引をおこなったのとは対照的である（西川 2015: 264）。



写真2：猛海の茶葉を使用して作られた緊圧茶の一形態である茶餅。直径約19cm、高さ約2cmである。円盤状の形で、包装紙に「猛海大葉七子餅」の文字が見える。

そこで、1909年に張堂階という人物が当地に恒春茶莊を開設し、茶の加工を開始した。張堂階の茶莊については、1958年8月におこなわれた、恒春茶莊の従業員に対する聞き取り調査の中で次のように述べている⁴²。

74歳のタイ族資本家刀喃温^{とうなんおん}の話によると、24歳で刀氏が猛海にきた1、2年後に張堂階が揉茶（揉捻のこと）を始めた。これが猛海で最も早い揉茶である。これ以前猛海では茶葉の散茶を思茅に運んでから揉製（揉茶により分別した茶をそれぞれ一定の形に整える作業）し、チベット族が毎年3月と10月の2回思茅まで茶を買いにきた。張堂階が茶号を設立し、思茅から漢族の揉茶技術者を呼び寄せ、揉茶と製緊（茶に圧力を加え固める作業）を開始して

以降、チベットに運ぶ茶葉は猛海から輸出されるようになり、チャイントン、ヤンゴン、コルカタ、そしてカリンポンを経由してチベットに運ばれた。これ以後、漢族技術者の指導の下、多くのタイ族やその他民族の揉茶技術者が養成され、猛海では茶の加工技術を持つ茶莊が次々と現れた。

このようにして揉茶や揉製といった技術と技能を有する漢人技術者が猛海に招聘されたことで、現地の人々の中にも茶の加工技術を彼らから習得しようとするものが現れた。ここにいたり、技術移転のプロセスとしての移転段階から、漢人技術者から技術・技能を学び、それを支える職能集団が地元社会において育成されるという、定着・普及という次の段階に移行したといえよう。加えて1928～29年にかけて地元猛海のタイ族土把総刀宗漢が新民茶莊を設立した。この茶莊は漢人との合併であり、資本が不足していたものの、茶の加工を自らおこなった。さらに、茶莊で雇われていた労働者には、易武・倚邦・石屏・思茅などの茶の加工技術と技能を持った出身地のものが含まれており、経験者として一役買ったと推測される⁴³。

これ以降、前章で詳述したように当地には次々と茶莊が設立され、チベット向けに盛んに普洱茶が生産された。加工技術の移転とミャンマー経由の新たなチベットへの交易路の開発により、豊富な産出量を誇る猛海地域の茶山を外部の市場と結びつけ、より活況を呈すようになった。民国期普洱茶の大消費地となったチベットであるが、この背景には、猛海において技術移転により加工が地元でおこなわれるようになったという事情が存在していた。

2 元江における栽培加工技術移転

つづいて元江の事例について分析していく。元江における普洱茶生産は、前述したように1890年頃に生活にいき詰った人々が六大茶山に出稼ぎに訪れたのを

42 『雲南省傣族社会歴史調査材料—西双版纳地区—』(9)「猛海工商業資本家対各族労働人民的剝削」には、「抛74歳の傣族資本家刀喃温談，他24歲到猛海，1-2年後，始有張堂階揉茶，這是猛海揉茶最早的一家。在此以前，猛海茶葉散茶運至思茅揉製，藏族在每年三月和十月，兩次到思茅買茶。張堂階設立了茶号，由思茅請来了漢族揉茶師，開始揉茶製緊茶以後，運往西藏的茶葉便由猛海出口，經由景棟、仰光、加爾各答噶倫堡而進入西藏。此後，包括傣族和其它兄弟民族的大批揉茶技術人員，在漢族師傅的培養下成長起来，而猛海地区揉製茶葉的商号也如雨後春筍，紛紛出現」とある（中国科学院民族研究所雲南民族調查組雲南省歷史研究所民族研究室 1964: 53）。

43 『雲南省傣族社会歴史調査材料—西双版纳地区—』(9)「猛海工商業資本家対各族労働人民的剝削」には、「1928-1929年又有以下幾個茶莊開業：土司組織的“新民茶莊”，2盤電…受雇工人主要是漢族、傣族，此外有拉祜、哈尼等族。工人除少数来自瀾滄、易武、倚邦、磨沙、石屏、思茅等地外，多数是猛海人…當每年六月開始揉製茶葉的時候，他們即受雇帮工」とある（中国科学院民族研究所雲南民族調查組雲南省歷史研究所民族研究室 1964: 53、57）。

契機とする。

栽培から加工までの経緯は、民国『元江志稿』に詳述されているように、見聞きしているうちに、茶の栽培と製茶の方法を習得したので、茶の種をたくさん購入して、元江に帰郷後、学んだ通りに栽培し、製茶したところ、品質・風味・色合いともに倚邦や攸楽の茶に劣らないものとなった。さらに、20世紀初頭には売行きが好調となり、さらなる茶の改良にも努めていることから、将来的な発展が期待されるほどに成長を遂げた⁴⁴。

元江の事例では、出稼ぎ労働者が、六大茶山で栽培と加工の技術と技能を習得したうえで普洱茶の生産をおこなった。つまり、元江では出稼ぎ帰りの人々が「如法種植」でき、「依法製成」するだけの技術と技能を身に付け、六大茶山に匹敵するほどの高品質な茶の生産に成功しており、技術と技能の移転がおこなわれていることが確認できる。

加えて、1942年出版の『雲南経済』には、元江の普洱茶生産について「元江県と鎮沅県で生産される茶は、猪羊街茶が有名であり、そのほとんどが香港と広州に輸出される。七弓茶の主要原料であり、年間生産量は約2,000担である」とあり⁴⁵、高級茶の消費地である中国沿岸部を主要な輸出先として、時間的にも栽培開始から半世紀近く経ている。元江が六大茶山に地理的に近いこともあり、技術移転が、技術・技能を習得した職能集団が育成される定着・普及の段階に達していた可能性が高い。

新たな茶山として清末から台頭してきた元江は、高い購買力を誇る中国沿岸地域向けに栽培と加工の技術・技能の移転を経て、高品質な普洱茶を供給するという重要な一役を担うようになった。

3 大理における加工技術移転

最後に、大理において生産された沱茶について分析する。沱茶は、現在の四川省宜賓市にあたる沱江叙府一帯向けに販売され、原料の産地と成分により、順寧・双江・緬寧で生産される関茶と、順寧・景東・景谷で

生産される景関茶に分類される⁴⁶。



写真3：緊圧茶の一形態である沱茶。直径約8 cm、高さ約5 cmでお椀のような特徴的な形をしており、包装紙に「下関沱茶」の文字が見える。

さて、沱茶については、猛海茶工場の工場長を務めた唐慶陽が、1944年刊行『中農月刊』に掲載の「雲南之沱茶」の中で次のように述べている⁴⁷。

光緒20 (1894) 年、雲南省大理出身の楊は、思茅や普洱に赴き、様々な蒸茶の製法を学び、故郷に帰って模造の円茶を作り、昆明や四川省の沱江叙府（宜賓）一帯で売ろうとしたが、毎年売れる量は限られていた。宣統年間になり、四川人の潘徳順がこのお茶が四川での販売に適していることを見抜き、楊と一緒に毎年数百担のお茶を作り、製法に改良を加えた。その後、市場は年々拡大され、沱江叙府一帯で盛んに売れたことから、「沱茶」の名が知られるようになった。

つまり、1894年、大理出身の楊という人物が思茅や普洱に赴き、「蒸す」ことで加熱をする「蒸茶」による加工技術を習得した後、大理での製造を開始した。その後、宣統年間（1908-11年）になって、四川出身の潘徳順が楊に協力し、改良を加えた結果、四川省の沱江叙府地域での販売に成功し、商業的な基盤を築くことができた。楊が、思茅や普洱で習得した加工の技術・技能を大理に移転し、協力者とともに四川向けに

⁴⁴ 註12参照。

⁴⁵ 『雲南経済』第12章の原文には、「元江、鎮沅両県所産之茶、以猪羊街茶著名、大半運銷香港、広州各地。為七弓茶之主要原料、毎年産量約二千担」とある（張 1942: L4）。

⁴⁶ 沱茶の原料に関して、『雲南経済』第12章には「以銷路別、有銷四川之沱茶（此中又因原料産地與成分配合關係、復有以順寧、双江、緬寧所産為原料之関茶、與以順寧、景東、景谷所産為原料之景関茶之別）」とある（張 1942: L1）。

⁴⁷ 「雲南之沱茶」には「光緒二十年間、雲南大理人楊某、前往思茅、普洱、習製各種蒸茶之製造後、返籍遂仿製円茶、試銷昆明及四川沱江叙府（宜賓）一帯、其時毎年銷量甚少。迨宣統年間、有川人潘徳順見於川銷頗為適合、商與楊某年製數百担、對於製造上、並有所改進。及後銷路擴大、逐年增加、因暢銷沱江叙府一帯、「沱茶」之名斯出矣」とある（唐 1944）。

これをブラッシュアップしたことで売上げの向上を実現したといえる。中国医学で名を馳せ、四川に滞在歴のある陳邦賢は、沱茶について『自勉斎隨筆』の中で「四川では茶文化が盛んで、沱茶、花入り茶、菊花茶があり、沱茶を飲む人が最も多い。下関の沱茶を最高級品とする。このお茶は風味が強く、色は黄金色で、何度もお茶を淹れることに耐える」と記しており、その人気の高さがうかがえる⁴⁸。

大理は、滇西の交通の要衝であるため、順寧・双江・緬寧・景東・景谷などの各茶山から茶葉を集めるのに適していた。また、その地形的な特性により風が強く、茶葉の乾燥に理想的であったため、民国以降、多くの茶号が誕生し、雲南沱茶の製造の中心地となった⁴⁹。

沱茶の事例では、栽培から加工までの一連の工程を完結させる元江や猛海とは異なり、各地の新興茶山で生産された普洱茶を滇西の中心地である大理に集約し、技術移転された加工技術にさらなる改良を施し、一括して加工をおこない、「沱茶」ブランドとして四川市場に販売した。このように、多数の茶号が絶えず出現し、大量の沱茶が生産されていることから、技術移転の過程は移転段階から安定した職能集団を形成する定着・普及の段階へと進展していると判断できよう。

以上のように、民国以降、普洱茶の需要が増加する中で、思茅を含む六大茶山を中心とした地域から栽培や加工の技術・技能の移転がおこなわれた。猛海では、加工の技術・技能の移転により、地元茶号が設立され、チベット向け普洱茶の輸出量の増加に貢献した。また、元江では、栽培と加工の技術・技能の移転がおこなわれ、仏領インドシナ連邦や中国沿岸部向けの高品質な普洱茶が生産された。一方、滇西の交通の要所であった大理では、地勢的優位性も手伝い、茶の加工技術・技能が移転され、滇西南の各茶山から集められた茶に加工を施し、沱茶として大消費地の四川を中心に盛んに移出された。

清末民国初における各地の普洱茶需要の急激な増加は、栽培や加工の技術・技能の移転とさらなる改良によって、各地域の消費者の要求に応えるだけの品質が

生み出されたことが主な要因であった。さらに、高品質な茶生産を維持するための職能集団が育成されたことで、市場への安定的な供給が可能となった。この背景には、清代半ば以来、六大茶山において貢茶の任を担ってくるなかで長い時間をかけて培ってきた石屏漢人の栽培加工技術の存在があったことはいうまでもない。

VI おわりに

清末民国初の普洱茶の生産拡大の主な要因については、これまで欧米列強の進出にともなう、加工工程の機械化や交通通信インフラの整備、世界経済との結びつきなど同時代的要素との関連性が強調されてきた(楊 2009)。

これに対し、本稿では、普洱茶に関する通史的な分析を通じて、清末民国初の普洱茶生産増加の背景には、物流と交通機関の革新に加え、乾隆年間以来培われてきた普洱茶の栽培や加工の技術・技能が各地に移転され、高品質な普洱茶の生産に注力することで市場のニーズに応え、茶の需要を喚起したことを指摘した。これまでの議論を整理すると、以下の4点に要約できる。

- ① 清代の乾隆年間を契機に、茶の栽培と加工の技術・技能が向上したことにより、市場のニーズに応じた商品が提供されるようになり、茶の品質に対する評価も高まった。
- ② 清末民国初、新たな運搬具の導入によって、遠距離地域への安全で迅速かつ定期的な貨物輸送が可能となり、大量生産と消費に対応した効率的な物流システムが構築された。この変革は、拡大する市場における普洱茶の供給を支える重要な要素となった。
- ③ 英領インド帝国の交通インフラを基にした物流ルートの確立は、第三者の介入を可能にし、普洱茶取引の不安定性を引き起こす原因となった。
- ④ 清末民国初に普洱茶の生産が拡大した要因は、清代以来の栽培と加工の技術・技能の移転と改良に

⁴⁸ 『自勉斎隨筆』の「下関の沱茶」には「在四川一帯，茶風很盛，有沱茶、有香片、有菊花，以喫沱茶的最多。沱茶要以下関の沱茶為最上品。茶味頗濃，顏色呈金黃色，並且可以耐泡」とある(陳 1997: 146)。

⁴⁹ 「雲南之沱茶」には「滇西大理與鳳儀兩県所屬之下関鎮，前臨洱海，後背蒼山，風力浩大，景口優美。製造沱茶，利用風乾，極其適宜。民二三年紛紛成立茶号，始有德和祥復義和兩号，年各製數百担。民十五六年，相繼停閉。民四五年有永昌祥，茂恒宝元通等号，年各製四五百担，今則年出千餘担。近年來又有雲南中茶公司復興茶廠年製千担，復春和振昌兩号年各製三四百担。此外尚有三四茶号，年共製五六百担，專售於水客。因此，下関則為雲南沱茶之製造地矣」とある(唐 1944)。

よる高品質な茶の生産、さらに安定的な供給を実現するための職能集団の育成があった。

清代から綿々と続く栽培と加工の技術・技能の向上と移転の繰り返しが、各地で求められる様々な条件を満たす多様な普洱茶ブランドを生み出し、消費市場の拡大と新たな消費者の獲得を支えてきた。近代的な交通手段が機能したのは、消費者の期待に応えるために高品質な茶を供給できたからに過ぎない。従来指摘されてきた共時的要素だけでは、清末民国初における普洱茶の需要の急激な増加を十分に説明することはできない。この現象を理解するためには、清代から受け継がれてきた普洱茶の栽培および加工に関する技術や技能の移転による品質の向上という通時的な視点が必要である。

また、20世紀における雲南経済と世界市場との関係性を議論する際、往々にして昆明を起点として滇越鉄道を介して繋がった香港、さらにその先に広がる世界市場との結びつきに軸足が置かれてきた。しかし、本稿で論じたチベット向けの普洱茶取引の事例は、近代的な交通手段を有する英領インド帝国を介して新たな輸送経路が開発されることによって、輸送効率が向上し、大規模な輸出が可能になったことを示している。しかも、この過程で、インド商人が関与するようになり、普洱茶の取引価格の決定権がコルカタに移行するなど、取引の主導権に重大な影響を与えた。したがって、雲南と世界市場との関係は、東の香港だけでなく、西のコルカタにも及んでいることは明らかである。

シブソンパンナーの茶山を基点に東南アジアを俯瞰すると、滇越鉄道と汽船によって結ばれた香港と、英領インド帝国内のビルマ鉄道と汽船を介して接続されるコルカタは、地理的に左右対称で扇形の配置を示している（図3）。普洱茶取引に象徴されるように、清末民国初に雲南で進展した世界経済との一体化を論じるうえにおいて、近代的な交通機関を備えた英領インド帝国との経済的結びつきも視野に入れる必要があろう。

参考文献

（日本語文献）

青野 寿郎・保柳 睦美（監修）

1951 『人文地理事典』古今書院。

石島 紀之

2004 『雲南と近代中国—“周辺”の視点から—』青木書店。

柿崎 一郎

2022 「戦前期ビルマ鉄道の米輸送—1930年代の米流通ルートの推計—」『横浜市立大学論叢，人文科学系列』73(1): 1-46。

工藤 佳治（主編）

2007 『中国茶事典』勉誠出版。

ダニエルズ、クリスチャン

1991 「十七、八世紀東・東南アジア域内貿易と生産技術移転—製糖技術を例として—」『アジア交易圏と日本工業化1500-1900』浜下武志・川勝平太編、69-102、リプロポート。

2004 「雍正七年清朝によるシブソンパンナー王国の直轄地化について—タイ系民族王国を揺るがす山地民に関する一考察—」『東洋史研究』62(4): 94-128。

栗原 悟

1991 「清末民国期の雲南における交易圏と輸送網—馬帮のはたした役割について—」『東洋史研究』50(1): 126-149。

久保 亨

2019 『日本で生まれた中国国歌—「義勇軍行進曲」の時代—』岩波書店。

権上 康男

1985 『フランス帝国主義とアジア—インドシナ銀行史研究—』東京大学出版会。

篠永 宣孝

1992 「雲南鉄道とフランス帝国主義—フランス外交文書に依拠して—」『土地制度史学』34(4): 37-50。

白鳥 翔子

2022 「清末期の電信事業—雲南省における電信建設とその運用を中心に—」『お茶の水史学』65: 73-89。

澤 喜司郎

1985 「ブリティッシュ・インディア汽船会社の成立と発展—東洋航路への蒸気船の進出と定期航路の開設(2)』『東亜経済研究』49(3・4): 77-98。

杉原 薫

1985 「アジア間貿易の形成と構造」『社会経済史学』51(1): 17-53。

台湾総督府官房調査課（編）（糠谷 廉二著）

1924 『雲南省事情』台湾総督府。

武内 房司

2003 「近代雲南錫業の展開とインドシナ」『東洋文化研究』5: 1-33。

2010 「一九世紀前半、雲南南部地域における漢族移住の展開と山地民社会の変容」『中国国境地域の移動と交流—近現代中国の南と北—』塚田誠之（編）、117-143、有志舎。

支那省別全誌刊行会

1942 『新修支那省別全誌』第3巻、雲南省、東亜同文会支那省別全誌刊行会。

西川 和孝

- 2015 『雲南中華世界の膨張—プーアル茶と鉱山開発にみる移住戦略—』慶友社。
- 2017 「清末雲南産アヘンの輸出ルートに関する一考察」『淑徳大学人文学部研究論集』2: 43-54。
- 2021 「雲南産アヘンの輸出と歴史的意義について—1912年から1935年まで—」『明治大学教養論集』559: 45-79。
- 2024 「雲南を巡る銭貨の旅」『野生の教養Ⅱ——一人に一つカオスがある—』丸川哲史・岩野卓司(編)、289-293、法政大学出版局。

増田 厚之・加藤 久美子・小島 摩文

- 2008 「茶と塩の交易史—十九世紀以降の雲南南部から東南アジアにかけて—」ダニエルス、クリスチャン(編)『論集モンスーンアジアの生態史—地域と地球をつなぐ—第2巻地域の生態史』、55-80、弘文堂。

松浦 章

- 2014 『近代東アジア海域の人と船—経済交流と文化交渉—』関西大学出版部。

松下 智

- 1986 『中国の茶—その種類と特性—』河原書店。
- 1998 『茶の民族誌—製茶文化の源流—』雄山閣出版。
- 2012 『茶の原産地を探る』大河書房。

山本 正三・奥野 隆史・石井 英也・手塚 章

- 1997 『人文地理学辞典』朝倉書店。

姚国坤

- 2007 「中国茶の分類と区分」(訳: 龍愁麗)『中国茶事典』工藤佳治(編)、29-34、勉誠出版。

(欧文文献)

Ann Maxwell Hill

- 1998 *Merchants and Migrants: Ethnicity and Trade among Yunnanese Chinese in Southeast Asia*: Yale University Southeast Asia Studies.

China Imperial Maritime Customs

- 1906 *Decennial Reports, on the Trade, Navigation, Industries, etc., of the Ports Open to Foreign Commerce in China, and on the Condition and Development of the Treaty Port Provinces, 1892-1901, with Maps, Diagrams, and Plans, Southern Ports, with Appendices*, Published by Order of the Inspector General of Customs, Shanghai, Vol. 2.

China the Maritime Customs

- 1924 *Decennial Reports, on the Trade, Industries, etc., of the Ports Open to Foreign Commerce, and on the Condition and Development of the Treaty Port Provinces, 1912-1921, Southern and Frontier Ports, with Appendix*, Published by Order of the Inspector General of Customs, Shanghai, Vol. 2.
- 1933 *Decennial Reports, on the Trade, Industries, etc., of*

the Ports Open to Foreign Commerce, and on Conditions and Development of the Treaty Port Provinces; preceded by "A History of the External Trade of China, 1834-81," together with a "Synopsis of the External Trade of China, 1882-1931" 1922-1931, Southern and Frontier Ports, Published by Order of the Inspector General of Customs, Shanghai, Vol. 2.

(中国語文献)

曹 茂・劉 晨宇

- 2024 「近代雲南茶文献研究(1840-1949)」『農業考古』2: 139-147。

陳 邦賢

- 1997 『自勉斋随笔』(民国史料筆記叢刊)上海書店出版社。

郭 垣

- 1940 『雲南省之自然富源』正中書局。

黄 桂枢

- 2009 「“茶寿”茶人倅学專家李弘一」『農業考古』5: 209-210。

李 弘一

- 1931 「西藏與車里之茶業貿易」『新亜細亞』2(6): 69-70。

劉 麗楣(主編)

- 2005 『民国時期西藏及藏区經濟開發建設档案選編』中国蔵学出版社。

劉 志揚

- 2017 「滇茶銷藏陸海通道的興起及其背景」『中山大學學報(社会科学版)』57(05): 116-123。

- 2021 「19世紀末到20世紀中葉印度茶葉在西藏的銷售及其影響」『民族研究』03: 121-133。

陸 朝

- 1997 『雲南对外交通史』雲南民族出版社。

秦 和平

- 1998 『雲南鴉片問題興禁煙運動: 1840-1940』四川民族出版社。

譚 方之

- 1944 「滇茶藏銷」『辺政公論』03(11): 48-60。

唐 慶陽

- 1944 「雲南之沱茶」『中農月刊』05(03): 65-68。

王 鉄崖

- 1957 『中外旧約章匯編』第1冊、生活・読書・新知三聯書店。

楊 斌・楊 偉兵

- 2010 「近代雲南箇旧錫鉄の對外運銷(1884-1943)」(楊偉兵主編2010『明清以来雲貴高原の環境与社会』、83-111、東方出版中心)。

楊 志玲

- 2009 『近代雲南茶業經濟研究』人民出版社。

姚 荷生

- 1948 『水擺夷風土記』大東書局(『民俗、民間文学影印資料』、上海文芸出版社、1990)。

雲南省志編纂委員會辦公室

1985 『統雲南通志長編』雲南省志編纂委員會辦公室。

張 肖梅

1942 『雲南經濟』中国国民經濟研究所(古佚小説会重印、2007年)。

中国科学院民族研究所雲南民族調查組雲南省歷史研究所民族研究室編

1964 『雲南省傣族社会歷史調查材料—西双版纳地区—』
(9)「猛海工商業資本家对各族劳动人民的剝削」
53-61。

褚 守莊

1934 「雲南之茶業」『國際貿易導報』6(7): 181-186。

(漢文史料)

李 元陽撰

民国23 (1944) 年刊本 万曆『雲南通志』。

謝 肇淛

(明) 刊本 『滇略』。

范 承勳等修・丁 煒等纂

康熙30 (1691) 年刻本 康熙『雲南通志』。

阮 元等修・王 崧等纂

道光15 (1835) 年刊本 道光『雲南通志稿』。

黃 元直修・劉 達式等纂

民国11 (1922) 年鉛印本 民国『元江志稿』。

張 間德修・楊 香池纂

民国 鈔本 民国『順寧県志初稿』。

Production of Puerh Tea in the Late Qing and Early Min-Kuo Periods

Kazutaka NISHIKAWA*

In the Late Qing and Early Min-Kuo Periods, Yunnan's establishment of the Haiguan 海関 and the development of transportation and communication infrastructure strengthened its ties with the world economy and promoted free trade with foreign countries. Under these circumstances, Puerh tea cultivation rapidly expanded from the six major tea mountains to the southwestern region of Yunnan. This paper focuses on the expansion of Puerh tea production and consumption that occurred during that period, and examines the factors that contributed to it.

Based on the historical records of the government officials who contributed to the development of Puerh tea cultivation, this paper will explain the expanded cultivation areas and production volume, clarify the consumption market and its consumption volume, and in relation to this, clarify the actual situation of the logistics reform between the two regions and tea quality improvement.

Through the analysis of this paper, it is pointed out that (1) the introduction of modern transportation systems made it possible to speed up logistics and reduce transportation costs in response to the expanding market under the integration with the global economy, shortening the time and economic distance between production and consumption areas and enabling regular transportation, thereby supporting mass consumption, and (2) in order to meet market needs, the cultivation and processing techniques that had been cultivated since the mid-Qing dynasty were transferred to various regions, and the focus on the production of high-quality Puerh tea further stimulated the demand for tea.

Finally, based on the case of Puerh tea exported to Tibet via the British Indian Empire, this paper emphasizes that the process of Yunnan's integration into the world economy at that time should not only be viewed within the framework of Hong Kong via the Yunnan-Vietnam Railway 滇越鐵路, but also Yunnan's economic ties to the west.

Keywords

Puerh Tea, Logistics, Technology Transfer

* Meiji University